

『同志社文学』
解題

岡	清	齋	店	松	吉	北	大
本	水	藤	村	村	田	垣	島
昌	邦		新	昌		宗	
夫	生	勇	次	家	恵	治	正

第一号—第十号

同志社文学会発行にかかる『同志社文学雑誌』は文芸作品のみを掲載するものではなかった。雑誌の内容から考えると、人文科学に関する評論雑誌といったほうがよさそうである。理化学に関する文章をも掲載しているので、『同志社文学雑誌』は同志社評論と解することができる。

この『同志社文学雑誌』が明治二十年に発行されたことについては、偶然のこととして見逃してよいであろうか。さてここでは一号から十号までの文芸的評論と作品を中心に『同志社文学雑誌』の本質をみようとするのであるが、明治の知識階級の自己表現の手段として文学をみると、その歴史は大体三期に分けられると思う。すなわち維新より十八年ごろまでを第一期、それから三十八年までを第二期、三十九年から明治末年までを第三期とする。

第一期に当る期間約二十年は仮名垣魯文、高島藍泉らの戯作、成島柳北、服部撫松らの戯文、東海散士の「佳人之奇遇」など政治小説が代表作としてあげられる時代であった。

現在いわれている意味での文学は、それ自身価値あるものと認められないで、単に功利的な面からだけみようとす
る傾向があり、近代文学以前の性格をもっていたと考えられる。

和歌、俳句、漢詩文が一般に認められたが、儒学の影響もあつて稗史小説の類は軽視され勝ちであつた。

第二期のはじめは坪内逍遙の「小説神髓」をもつてし、日露戦争終結を最後とするが、逍遙が「小説神髓」で政治
小説を否定し、小説は功利的目的をもつべきでないことを主張した。明治十八年の「小説神髓」と「当世書生氣質」
をもつて、日本の近代的文学論と文学作品のはじめとし、近代的自覚をもつ明治文学の歴史のはじめとするのが定説
である。

第三期は日露戦争ではロシアに一応勝利をおさめたが、直後、いわゆる大逆事件がおきて、あらゆる意味で日本の
知識階級は時代の行詰りを感じ、懺悔と反省にはいつた時代といふことができる。

さて、『同志社文学雑誌』が発行された明治二十年は前述の時代区分では第二期の初期に属し、前近代的文学観と
近代的文学観とがまだ共存していた時代といふことができる。

一号から十号までの文芸的作品と文学論に限定して考える際、まず一号が二回発行されていることによつておきた
い。

二十年三月十二日号は発行出願上正規の順序をふまなかつたため、京都府警察部に没収され、翌四月三十日あらた
めて第一号を刊行した。もつとも没収されたときにはすでに二百五十部を売りつくしていた（以上重久篤太郎氏の調査
による）。

この雑誌には教師の一部と学生が寄稿しているが、同志社が認めて発行した後年の同志社人文学その他の学会誌と

は趣きを異にする。

論文は一篇につき四百字詰原稿紙四、五枚のものが大半で一頁六百九十字である。文章論を中心とする文学論も漢文調で硬い感じのものが多い。

文章論ではほとんどのものが新体詩に反論を加え、言文一致にも反対しているが、言文一致に賛成し、言文一致体の文章で書いている一篇が目立っている。桑田常造「文章論」——第一号（明治二〇年四月三〇日）——がそれである。

「抑モ文章ハ之ヲ西洋文明ノ思想ヨリ申シマスレバ言論談話ノ写真デシテ其目的ハ広ク公衆ニ知ラシメ遠ク万世マテ伝フルガ為デアリマス」という書き出しで、今後の日本人の文章は言文一致体でなくてはならぬと論じ漢文を排斥している。しかし間もなく、松浦政泰「文学雑誌ヲ評ス」——第三号——において言文一致のこの主張を斥けている。十号までを通読してみると、桑田の文章論はあきらかな自己主張をもっているのできわ立っていることは事実である。

新体詩に対する反論は鈴木左馬二郎「和歌ノ巧用ヲ論ズ」——第八号——、近藤又三郎「新体詩を難す 其一」——第九号——であるが、前者は日本の詩学を漢語で綴る詩と和歌に二大別し、漢詩で日本の詩歌を考えるよりも、和歌を女子のものとして軽視せずに再考すべきであると主張する。しかし次のように新体詩には非難を浴びせているのである。

「……和漢洋ヲ折衷セルガ如キ新詩体ヲ創作セリヨツテ吾人試ミニ其ノ新体詩ヲ読ムニ（中略）言語ノ雅美ナラザルハ其ノ欠点ト云ハザルヲ得ズ（中略）『打テ洩ラサレシ浪党ヲ愍ミ扶助シ隱家ノ』ト倭言葉ノ間ニ突然平常用キサル漢語ヲ用キタルガ如キ『ドウモ心ニ落チカナル倍テモ死ナンカ死ヌルルノハ』『死後ノ恐レガ有ルカラシヤ』『キラキラキラト輝ケリ』ト野鄙極マレル語ヲ用キタルガ如キ『慄悼決死ノ士』『彈丸雨飛ノ間』ト漢語ヲ連用シタルガ如

キ『国ノ東西世ノ古今人ノ高卑ヲ問ハズシテ学ノ道ニ就クモノハ』ト散文ヲ丸出しニシタルガ如キ実ニ言語雅美ナラズシテ何ノ風味モナク……」

また近藤は、外山正一の「抜刀隊」をヤリ玉にあげて新体詩を同様に排斥する。

馬場定二郎「稗史小説ノ利害ヲ論シテ明治ノ少年ニ示ス」——第二号——は「……他日我国ノスペインナルナラントハ此ノ責フヘキ我邦ノ少年ガ稗史小説ノ為ニ受クル災害ハ果テ幾何ナルヘキカ……」と論じ「昔時已ニスマイルス氏云ハク今世ニ斯ノ如キ書ヲ著シ時人ノ好ニ投セントシ卑俗ヲ嫌ス諧詛ヲ避ス人倫ノ法ヲ破リ上帝ノ律ヲ慢ルハ真ニ厭ヒ悪ムヘキナリト嗚呼今ノ稗史著作者ヨ汝ハスマイルス氏ニ対テ何ノ面目カアル」といつて小説の書を訴えている。ここにスマイルス氏と述べられているのはサミエエル・スマイルスのことである。

かれの「自助論」は明治四年に中村正直によつて「西国立志編」として翻訳され、青年に多く読まれた。当時の学生は士族の子弟が多く、ほとんどが幼少のころから漢学で訓練されていたから西欧の文章の翻訳でも、自助論などは十分に理解し得る素地があつたであろう。しかし、いかに中央で近代文学の芽がでていようと、地方の知識層全般に強い影響を与えたと考えないほうがよい。

馬場の論文はその間の消息をよく伝えているといえるし、スマイルスが多くの青年に迎えられたことを物語っている。

第三号の松浦の論文では同志社より数百の徳富猪一郎が輩出するようにと書かれている。当時すでに民友社を創立して中央論壇で活躍していた徳富猪一郎は同志社の書生たちにとっては一つの目標であつたことがよく判る。この気風は『同志社文学雑誌』をみる場合には無視できない点ではないだろうか。

十号までの間に翻譯文学としてあげられるのは次のとうりである。

ロングフェロー「村里の鍛鉄場」(七号)

ラルヴィング「新郎の幽霊」(九号、十号)

セリア・サキスター「レスキウド」(九号)

チャンニング「優美の感」(十号)

森田思軒がアーヴィングの「幽霊新郎」を報知新聞に訳したのは明治二十二年であるから、同志社文学の訳のほうが二年早いことになることは注目すべきである。その訳者春陽学人は「本篇は訳と称すれども往々文句を取捨する所あり又訳者自己の美術的思想を注入する所少なからず学余の戲訳素より疵瑕紛々たるを信すれども若し一場の笑を讀者に買ふを得ば幸甚」と訳者としての態度を明らかにしているように翻譯案に近いことが知られる。また訳文もどちらかといえば戲作風であるといえよう。

九、十号と続いている英米文学大家列伝略ではチャウサーの「かんどるべり・てーるす」、ダンテの「でうあいな・こめであ」、ペツラークの「そんねつ」、ボケツシャウの「できやめろん」、エドモンド・スペンサー、ウイリアム・セーキスピニアなど作家と作品がでてくる。

『同志社文学雑誌』は各号に漢詩、和歌はじめ新体詩(十号までに五篇)が掲載されている。新体詩が排斥されつつもいくつか、採用されていること、また文芸作品としては詩を主眼としている点は注目すべきであると考えられる。

このように一般に詩が歓迎されたことは、教師山崎為徳が明治十二年から十四年まで、主として英文学を講じた際、最もミルトンを好んで「失樂園」を教えたことも原因するかもしれない。『同志社文学雑誌』にはさかんにミル

トンの名がでてくるが名講義であつたといわれる「失楽園」は学生間に代々伝えられたとも考えられる。

明治十九年に同志社に入学した徳富蘆花が第二号に「孤墳之夕」という小品を寄稿している。彼は二十二年には民友社に入つたが、同志社在学中にこの雑誌に発表した文章はこれ一篇であるという点で珍重すべきであろう。横井小楠の墓に詣でた感想文であるが、後年の「自然と人生」の味もなく、硬い感じの文章で、従来蘆花全集にも採録されてない。

また、後年政治家評論家として活躍した安部磯雄や大西祝も寄稿しているが、かれらの行動とあわせてみるべきであると思う。

(大 島 正)

第十一号—第二十号

『同志社文学雑誌』の十一号から二十号までが出たのは、明治二十一年から二十二年にかけてのことである。西暦では一八八八年から一八八九年に当る。一八八八年といへば二十世紀前半の英米の詩に非常なインパクトを与えたT・S・エリオットの生まれた年である。また一八八九年の二月十一日には憲法が發布され、その国民的な感動は『同志社文学雑誌』でもいくつかの素朴な漢詩となつて表現されている。同志社でも憲法發布祝会が行われたことが、二十号の「本校記事」の欄にみえる。新島校長は当時戸で静養中であつたため、この祝会には出席しなかつたが、彼が祝会委員あてに書いた手紙が同じ二十号に掲げられている。

新島襄は翌明治二十三年一月二十三日に永眠するのであるから、この時期はいわば新島の晩年に当る。『同志社文学』と新島の関係については、詳細はわからないが、少なくともいえることは、この雑誌の関係者一同が、新島の大立運動に共感しており、また彼に心からの敬愛の念を抱いていたことがひしひしと感じられることである。病中であるため、学生は新島に会うことを禁じられていた。というよりは新島の方が、教授会の決議によつて、学生に会うことを禁じられていた。彼の切々たる学生への気持は、この『同志社文学』の中に時々つつている学生宛の手紙からも察しられる。しかし、ひときわ目をひくのは、徳富蘇峰が同志社学生に對してなした演説である（十七号所載）。蘇峰のこの演説は、読み方によつてはアジ演説ととれるふしがあり、今の過激な学生運動家たちが知つたならば、さぞ得意がるだろうとさえ思われるものである。蘇峰は東西の歴史にくわしく、自由に例を引きながら、少数の「調子外レノ人」が今の日本に必要であり、彼らこそが社会を指導し、新しい世界を築いていくのだと説く。

「此ノ如ク潮勢頗ル急ニ浩々沛然トシテ天下ノ人心ヲ押シ流シ名奔利走ノ大渦中ニ捲キ陥サントスルノ際山ノ如ク翻落シ奔馬ノ如ク衝突シ来ル狂瀾怒濤ノ逆巻ク中ニ屹然突立微シモ動カズ寄セ来ル波浪ヲ碎破シ去ル巨岩ノ如ク突兀トシテ社会水平上ニ聳立シ精神的運動ヲ日本社会ニ喚起スル其起動者タルモノコレ即我新島先生ナリ」

これは演説の記録ではあるがまさしく蘇峰調であり、その漢文調のリズムにはあやしい魅惑さえ感じられる。この演説は新島の在世中になされたものである。そして、徳富蘇峰は当時の学生たちの中にあつては、東京で『国民之友』を発刊しつつ大活躍をしていた少壮の先輩であり、願わくばそのように文章を書き、そのように活躍したいと学生たちが願う憧憬のまゝであつたのである。

『同志社文学』の特色の一つが、キリスト教の色彩であることはもちろんである。しかし、それは濃厚な色彩であ

ると断定することはできないであらう。キリスト教は、国家、社会、道德、教育等を論じた諸論文の根底に横たわっている。キリスト教を真正面から取上げた論文も少くない。しかし、キリスト教に真正面から反対するような論文はない。それでは『同志社文学』のキリスト教はどのようなキリスト教であつたらうか。

同志社のキリスト教が、ニュー・イングランドから直輸入されたところの組合教会のキリスト教であつたことは歴史の教える通りである。それはビューリタニズムのかたちをとつて伝えられた。従つて武士道的な、禁欲的な側面をもち、当時の向学の気魄に燃える若者たちに訴えるところが強かつた。神は、「神」という名で呼ばれることは比較的稀で、「上帝」という語が好んで用いられている。しかも、キリスト教が、時として「デウス・エクスマキナ」式に用いられている例が見られて、ちよつとおかしい気がする。そのよい例は深井英五の「自由論」(十四号)である。

深井は人間性を分析して善悪の混合物と考へる。もし人間性の中にひそむ悪の分子を退治することさえできれば、あとは善の分子のみ残るのであるから、その時こそ真正の自由が得られる、というのである。なるほど理屈通りである。しかし、それではどのようにして自己の中の悪の分子を消去するのか。この問題に「実存的に」悩み、格闘するところまで深井は行かない。彼の文章は次のように結ばれている。「古往今来誰か能く邪曲の分子を打破したるもの未だ自己の心中能く邪曲を打破したるものすらも聞かざる所なり況や社会をや嗚呼予を奈何せん予は自由を得るの力なし予をして自由に至らしむるものなきか此秋に際しデベリアの湖辺ヨリヴェットの山下予誰一種異常の声を耳にするのみ曰く「我れ既に世に勝てり」又曰「真理は爾曹に自由を得さすべし」と抑も是れ誰の声そや」

なるほど新約聖書の「ロマ書」には、これと類似の叫びがある。しかし、使徒パウロの場合にはキリストとの出会いが否定することのできない力強さで迫ってくる。深井の場合は、これで魂の問題が解決したという確信はもてない

のである。それは彼が、人間性の中の悪の分子を除去しようという、素朴な前提に立っているからである。

津下紋太郎の「明治ノ青年須ラク自由ノ元氣ヲ養成スベシ」(十一号)は意気旺んな文章であつて、その結びは次の通りである。「嗚呼明治ノ青年ヨ汝國家ノ文明ヲ希フカ何ソ自由ヲ求メザル汝自由ヲ求ムルカ何ゾ自由ノ元氣ヲ養ハザル汝自由ノ元氣ヲ養フヲ願フカ何ゾ真理ヲ求メザル汝真理ヲ求ムルカ何ゾ基督ニ行イテ之レヲ求メザル」なるほど「ヨハネ伝」に「真理は汝らに自由を得さすべし」とある。津下はこの聖句をまるで切札のように用いて文章を結ぶのであるが、この論文でいつている自由は、はたしてキリストがヨハネ伝で意味している自由と同じものであるかどうか、疑わしい。津下は、同じ自由という言葉をも、「デウス・エクス・マキナ」式に利用したとしかとれない。

花島健起は同志社内に数多くの演説練習のグループが存在することを述べたあとで、説教を練習するグループが一つもないことをあやしみ、そういつた仲間ができることをすすめている(十六号)。この寄書では花島の説教論が展開されるわけで、普通一般の演説と説教との相違、説教にともなう特別に困難な点の指摘などがこれに続いていて、興味深いものになっている。花島自身の説教の経験がこの寄書に反映していることは明らかであろう。

西洋の文学作品の翻訳としては、アメリカ詩人W・C・ブライアントの「死懷」(Thanatopsis)の散文訳が十一号に掲げられている。また十八世紀のイギリス詩人ウイリアム・クーパーの「ジョン・ギルピン」の散文訳も同じ号に出ているが、この訳は全詩二五二行のうち一三二行までの訳で終っており、一三三行以降の訳はついに日の目を見なかった。「ジョン・ギルピン」の訳者東豫学人の訳しぶりは忠実な直訳で、誤訳と思われる点は一箇所しかなかった。同じ十一号にゼーン・テール作の「董菜の歌」が松雪子の和訳と蟠松髦の漢訳で出ている。しかし、「ジェイン・テラー」という女流詩人が誰であるか、今までのところ手掛りがない。

十二号に「人の定義」と題してカーライルの『衣裳哲学』の一節の抄訳（第一巻、第五章の最後の三節）が出ている。訳文は漢文調で、はなはだ生硬である。十九号、二十号に、フランスの小説家サンピエールの『ポールとヴィルジニ』が、「有為転変」と題して連載されている。薇倉道人の「戯訳」となっているが、この訳業は二十号で磯貝雲峰によつて手厳しくたたかれた。薇倉道人の反論が二十一号に出ているが、公平にみて雲峰の批判に堪えるような仕事でない。そのためか、二号続いただけで、二十一号からはもうのつていない。サンピエールのまじめな作品を「戯訳」するとは何事か、というのである。しかも、英訳テキスト（フランス、ノルウェー、ロシア文学等の場合、当時の同人たちはたいてい、英語訳からの重訳をした）と、薇倉道人の訳とを四箇所にわたつて対照して、その訳の「或ハ直訳ニ流ル、アリ或ハ意味ヲ解スル能ハサルアリ甚シキハ原文ト訳文ト文意ノ相合ハサル所アルガ如」きことを責めている。この雲峰の文章は、雲峰自身の翻訳論で結ばれているが、これは卓見であり、『同志社文学』の同人中屈指の文学青年であつた雲峰の翻訳方法論として、貴重な文章であると考ええる。「抑翻訳ヲセントスルモノハ宜シク原文ノ意ヲ悟リ然ル後原文ニ拘泥セス其文意ヲ訳述スルヲ以テ宜トス国語異レバ文体モ亦同シカラサルハ数ノ免レサル所ナレバ他国ノ文章ニ拘泥シテ之ヲ自国ノ文ニ訳サントスレバ即チ直訳ニ流レ殆ト原文ノ意ヲ伝フル能ハザルニ至ルヨシ其意ヲ存スルトモ原文ヲ読マサル人ニハ解スル能ハサラシム」

雲峰の批判は散文訳のみならず、韻文訳にも適用できるであろう。十五号に「近藤君ノ訳詩ヲ読ム」という寄書が掲げられている。寄稿者の名はブランクになつていたので、想像するはかないのであるが、論旨のすすめ方と、文体から推して、これもまた雲峰の筆であると想像してもよいであろう。批判の槍玉に上つたのは九号、十二号に「新体詩を難す」と題して堂々と論陣を張つた近藤又三郎（鉄腸）である。鉄腸は新体詩作者先生たちが、その運動を新体詩

と呼ぶのは当らない、むしろ七五体は「古体の復興」といふべきであると断じ、さらに、新体詩作者たちは「言語の卑野なるか爲に、其意匠を充分に顯す事」（十二号）ができていない、と論じた。その卓説をはいた近藤鉄腸の新体詩風の訳詩「かたみの涙」が十二号にのつたのである。たしかに、各連のはじめを五シラブルではじめることによつて、工夫がこらされているが、七五体の中に字あまりを無規律にとり入れたこと、「野卑ナル言語ヲ列举」したことで無名の寄稿者によつてきんざんに叩かれたのであつた。無名氏は、近藤の論説には両手をあげて賛成しておき、その同じ趣旨でもつて近藤を叩くという巧妙な批判を試みたわけである。近藤鉄腸のこれに対する反論がのらなかつたところをみると、近藤は反論をあきらめたのかもしれない。なお「かたみの涙」の原詩が何であるのかは不詳である。

なお、風変わりな翻訳としては、二十号に、英詩“Twinkle, twinkle, little star”の漢訳がのつている。「熒々彼小星、驚異夫何物……」といった調子で面白い。

最後に、各号にのつている短歌について一言したい。十一号から二十号までの十号分に関する限り、あまりすぐれた短歌はみあたらない。題材の大部分は花鳥風月であり、新古今あたりの秀歌の模倣一点ばりであつて、万葉集にみられるような大胆な、人間感情の流露は見当らない。

岡の辺の梅の林にかゝりけりのとかに霞む春の夜の月
 （海士か家の主人、十二号）

あたこ山去年のみ雲も打霞みおほるにのこる有明の月
 （同、十二号）

あわち島汀のあしは見えやらて霞によする沖津白波
 （諏訪仙人、十三号）

夕日かけ杉の林にかくろひて我柴の戸に秋かせそふく
 （雲峰逸史、十七号）

むらからすねくらに帰る声すなり遠山里の秋の夕くれ
(鈴木太馬次郎、十七号)

右の五首でその傾向は一目瞭然である。花鳥風月以外の題材をもつ短歌はその数が少い。そしてそれらとても当時の短歌のマンネリズムを打破るほどのものではない。

ペテロ祭司の長の庭を立去りて悲むかた

衛士の焚庭火の煙いかはかりくゆる心の苦しかりけん
(海士か家の主人、十二号)

憲法発布を祝ひ奉りて

例なき恵の露にいくはくの世の民草やおひ茂るらん
(雲峰、二十号)

このような短歌の不振は、『同志社文学』の外での短歌の不振の反映であつたと考えて差支えないであろう。

(北垣宗治)

第二十一号—第三十号

明治二十二年四月から二十三年二月にかけて同志社文学会から出された、『同志社文学会雑誌』の第二十一号から第三十号までを通じて、とくに時代の特色を示している点の一つは、同志社独自の気風に対する考察のあることである。

第二十一号の八論説V欄の「敢て問フ同窓ノ諸君」は、のちに十一代目の総長を勤めた牧野寅次の筆に成つたもので、「創立以来我校特有物トモ誇ルベキ所謂元氣」が、その「代表者タル教會員諸君」の「増加スルニ及(反)の

誤植か) 比例シテ年二月ニ孤城落日ノ姿アル」ことから書き出し、「吾人素ヨリ基督ノ教ト人間ノ智ト相矛盾セザル……ヲ知ルサレド智識ハ如何ニ発達スルモ以テ其人ノ徳性品格ヲ養成スル能ハザルナリ……短衣ヲ着シ弊袴ヲ穿テ慷慨悲憤傍ラ人ナキガ若キ……弁舌ニ巧ミニ文章ニ妙ニ以テ一世ヲ動揺セントスルモ……智力裕カニ学理ニ達シ口ニユートンノ発明ロツエノ哲理ヲ暗ンズルモ以テ我校特有ノ元氣ト称スルニ足ラザルナリ然ラバ何ヲ以テ我校特有ノ元氣トスル曰ク他ナシ活ケル能力アル基督教ヲ實際ニ応用スルニアルノミト吾人ガ基督教ヲ奉ズル所以ハ決シテ哲理深遠ナルガ故ニアラズシテ是ニ由テ吾人ノ品格ヲ養ナヒ吾人ノ生命ヲ得以テ真正ノ人間タラント欲スルニ外ナラザルナリ」と説き、「我が同窓ノ諸君ヨ卿等ハ果シテ凡テノ功名心利欲心ヲ棄テ、十字架ヲ取ルノ勇氣アルカ凡テノ学識ト智力トヲ抛ツテ信仰ニ進ムノ覚悟アルカ……今全校ノ中誰カ自己ノ私欲ニ勝テ自ラヲ清クシ真ニ信仰ニ因テ義トセラシ、ノ者トナリ自ラ問ヒ自ラ答ヘテ神ノ婢僕タルヲ告白シ得ルモノゾ……嗚命(嗚呼)の誤植か) 全校ノ学生中誰レカ任ジテ我校ノ元氣ヲ挽回スルモノゾ」と問うている。

第二十三号の八論説V欄の「乱臣賊士」は、「歴史上に見らるゝ……所謂忠臣逆士の大現象」を振り返つてから、「今日我か同志社義人なしとせず、然れども亦賊士なしとせんや、義士忠臣とは誰を云ふか、同志社の学徒なり、賊士とは誰を云ふかも亦然り、……同志社の主義を不知る……是れ彼れに愛校心なきなり、我を愛せざるは国を愛せざる者なり、是れ豈に賊士とせざるを得へけんや、……日本清教徒として、其の精神元氣を失ふ是れ皇天をナイガシロになすもの……同志社の賊は同志社にあり、而して同志社教会にあるなり」とし、さらに、「余が天眼通、未だ新島氏の人となりを知すと雖ども、……自由を知り真理を求め、平等を行ひ等しく平民主義の精神を以て、畢生の目的とするは、氏か精神たるを信じ、諸士が最大の存念たるは、余が深く信じ密かに是を傲り、又聊か此を以て任するも

のなり」と述べ、「同志社の主義、今何処にか飛躍し去る、同志社の精神、果して何人の脳裏にか存する、……北風よ起りて我が園の塵を排へ、南風よ来りて我が園を吹て其の花の香氣を揚げよ」と訴えている。

同じ号の同じ欄の「同窓諸子ニ一言ヲ呈ス」は、同志社が「上貴顯紳士ヨリ下万民ニ至ルマデ其子弟ヲ托スベキ学校ナリト迄デ其名ヲ知ラレタル」理由を「基督教主義」に求め、「大学設立等ノ企図」に触れつつ、それを「我が社ノ徹頭徹尾貫クベキ主義」としたうえ、「現今ノ同志社ノ位置ハ……決シテ平地ヲ旅行スルガ如ク容易ナルコトニ非ズ……此ノ時ニ当リ吾人ハ宜ク恐ルルコトナク勇氣ヲ以テ進ミ充分ニ自治ノ精神ヲ發達セシメ正義ノ為メニ身ヲ犠牲ニ供シシヨンプライイトノ偏窟ヲ學ビ徳富氏ノ調子外ニ習ヒ真面目ニ我が社ノ美風ヲ吹吸シテ有為活潑ノ男子トナリ孜々トシテ勉勵スルニ非ズンバ……」と戒めている。

同志社が、新島襄の十数年にわたる苦心經營の結果、ようやくいわば土台づくりを成し終えて、明治二十一年十一月、「同志社大学設立の旨意」を發表、日本にキリスト教主義の綜合大学をとの、かれのかねてからの理想への第一歩を踏み出したとき、そこには、すでに、このような内面的危機の訪れがあつたのだ。第二十七号の人文学会雜誌の欄が「吾が友愛なる同志社学校の諸兄姉に望む」という表題のもとに、新島の「脱国」について、「諸氏若し真に其の境寓熟知せば、今日は徒らに局促として儉安を貪り、苟且を樂むの時に非ず、濃情憤起慨然として大に期する処勿る可らざるの時なるを知らん、……幸に之を記せよ、吾総長新島襄氏が万死を犯し父子の愛情を割し辛酸悲愁を越歴せし時には現今同志社学校が漸く地下に向て其の根本を鞏固にせしを」と云っているところにも、同じように危機の自覚が認められる。

明治二十三年一月の、大学設立資金募集のための、旅の途中での新島の死のあとの第一号に当たる第三十号には、

八詞藻V欄に「故新島先生之詩」として三篇の七言絶句が、また八本院記事V欄に「故新島先生を追悼す」など六つ
の短い関係記事が載せられている。その記事に引かれている、かれの言葉——「自由教育自治教会両者併行邦国万
歳」——「偶儻不羈の青年を自由に発達せしめ」——あとののは、「遺言の一」とされている。

もう一つの点は、「憲法」や国会についての論議の見られることである。

第二十一号と第二十二号の八論説V欄に跨がっている「日本人民の将来を論じ併せて我國の有力者に望む」は、一
種 of 教育政策論であつて、そのなかで、「帝國憲法」を「自由なる憲法」と呼び、「平民主義を愛する人士よ民権論に
熱心なる諸士よ社会の進歩は諸士の尽力を俟ずして民権を増長すべし」と云い、国会の開設によつて、「国会議員た
らんと希望は青年の腦中に充満し青年をして學問に心酔せしむるの推力とな」るだろうとしている。

第二十六号の八文学会雑誌V欄の、「徳富猪一郎君來校の時」の「演説の筆記」は、「維新の革命中」に「公議輿
論」が「一種の原動力」であつたことについての、いくつかの解釈の紹介のあとで、「維新革命の際にては只借用の公
議輿論なりしなり要するに我々が希望しつゝある真個の公議輿論は到底二十三年後に至りて頭はれ来るべしと私は信
ずるなり去れど此波間を浮み進みて之を成し遂ぐべき決心覚悟は諸君今日に於て尤も必用の事かと思はれます」と結
んでいる。明治二十二年二月に「憲法」の発布があり、二十三年十一月に国会の開設が予定されていたのだ。

同じ号の八論説V欄の「東洋古代又タ民権論アリ」は、「昔時ノ日本ハ君主國也今日ノ日本ハ立憲國也……憲法発
布ノ時……ヲ促シ來リシ者ハ又実ニ民権論ニ在リ」とし、孟子の政治思想について、「今日ヨリ追想スレバ先生ハ実
ニ国会ノ如キ輿論ヲ代表スルノ好機ヲ得ンコトヲ熱望セリ……誠ニ此如クナラバ君民上下平和ニ円滑ニ過スコトヲ得
ベシ先生ノ民権論ハ立憲國ニ恰当シタル真正ノ民権論也」と述べている。ついでに云うと、中国の古典を扱っている

ものとして、ほかに、第二十二号と第二十三号の「雑録」欄に、それぞれ浮田和民の「礼記と哥林多前書」と「白楽天と聖書」があつて、文体の類似を論じている。

第二十八号の「文学会雑誌」欄の「国粹及び国家主義」は、「蝸殼的……攘夷的……自尊的国家主義」を却ける一方、「我憲法の発布」を「民主主義と君主主義」との「二真理調和の開元なり」と呼び、同じ号の「論説」欄の「立憲君主政体論」は、「憲法」の条文に基づいて、「立憲君主政体」が「共和政体」とも「君主独裁政治」とも違いのあつたことを説いている。

まさに確立されつゝあつた新しい政治体制に対して、さきの二つには、民主主義の要素への期待が、あとの三つには、それと君主制度との共存への支持が示されている。

国の基本政策については、このほか、植民主義の主張がある。

第二十一号の「文学会雑誌」欄の「殖民論」は、「欧洲列国」のように、「拓地植民」によつて「物産輸出ノ道ヲ開キ此ニ由テ内地ノ産業ヲ振起」することを、予想される国際的「生存競争」に耐えるための「富国の大策」とし、第二十八号の「論説」欄から第三十号の「投書」欄に続く「亜弗利加」は、アフリカでの植民地開発の実態を述べて、「嗚呼世界ノ文明ハ白哲（哲の誤植か）人種ノ支配スル処トナラン、……黄色人種ノ将来ハ果シテ如何、大和民族奮発醒起スル処ナクシテ可ナランヤ」と云つている。

このことに関連して、とくに目に着くのは、第二十六号の「雑録」欄の「雑感」のなかの「今や爪を磨する北域の鷲魯牙を嚙する南方の英獅（獅英の誤植か）陽に陰に侵略的に殖産的に他国の土を奪ひ他国の利を収めんとす吾人恐れざらんと欲するも豈に得可けんや」という言葉と、同じ号の「翻訳」欄に、「愛蘭独立党の忠実なる朋友」であつ

た「ロボルト、エムメツト」が、「国事犯罪を以て死刑の宣告を受け」たさいに「瀟腔の丹誠を數百言の中に傾注したる」手記が載せられていることである。

産業社会の矛盾を取り上げているものでは、さきに触れた「日本人民の将来を……」が、「我国既往二十年間」の「改革」のなかで、技術の進歩が経済の発達をもたらした反面、失業者の増大を伴い、そこに「貧富の兩階級」が生じたとし、これをなくするには、「貧者をして教育を受け得る自由を得しめ」る必要がある、と云っている。また、第二十五号の「論説」欄の「同盟罷工論（未完）」が、自由主義経済の立場からストライキ肯定論を展開、「英国製造所条例」の労働者保護の精神を高く評価している。これは、翻訳であるが、もとの筆者の名前が記されていない。

社会問題に関しては、このほか、第二十五号の「文学会雑誌」欄が、保守諸政党による政治主義的拘束・干渉からの「教育宗教及び商工業の独立」を唱え、主義のために「何人にも譲」らぬところに「我同志社の我同志社たる所以」がある、としている。また、第二十六号の「論説」欄の「明治青年ノ境遇及其責任」が、「社会ノ腐敗」の実例として「東京府会賄賂事件ノ如キ高等女学校艶聞ノ如キ……醜聞怪事」を挙げ、第三十号の「投書」欄の「廢娼説ヲ主張シテ府下青年ニ望ムアリ（承前）」が、「娼妓」という「不潔……奇怪ノ動物ヲ打払フ」ための「自動的運動」を青年に呼びかけている。

ここまでの、ほとんどすべて、この雑誌にとつての、とりわけ今日的な問題への取組み方という点で、とくに興味を覚えるものなから拾い出して見たものである。さらに、別な意味で注意を惹かれるもののうち、いくつかについて、ごく簡単に述べてみると……。

第二十四号の「文学会雑誌」欄の「日本學術の教育」と同じ号の「論説」欄の「夏期学校ニ対スル感情」は、とも

にキリスト教による日本の精神改革を主張している。前者は、「明治十一年本校第一回卒業式の時故山崎為徳君が卒業論文として朗読せられたる英文を翻訳せしもの」で、「唯物説の進軍」と「未だ発達せざる巨物」である「懷疑哲學」とに対抗して、「日本に新たな心霊の王国を創建せん」がために、「我同志社学窓の下には、……理性と信仰學術と宗教の喜ばしき結婚を見るに至らん」と述べ、後者は、その年の夏期学校での、新島襄の演説の記録で、「唯物論ノ盛ナリシ帝国大学ニモ既ニ基督教青年同盟会アルヲ見ル」事実を指摘、「基督教青年」は、「将来日本第二ノ維新日本心霊上ノ維新」を「全国力を協テ」成し遂げるべきだ、と云っている。

第二十五号の「論説」欄の「学校の価値」は、「帝国大学及び其他の官立学校」を、「建築の高大なる、輪奐の美なる、教員器械の完備せる」点では推しながらも、「官立は干渉主義……私立は放任主義」であることに「官立の私立に及ばざる所以」を見、この点から慶応義塾を「我邦に於ける私立学校の泰斗」としているが、「德育の欠点」のゆえに「未だ之を以て学校の価値あるものとなすこと能はず」と云っている。

第二十二号の「投書」欄の「印度人ダンマバラ氏」と第二十六号の「論説」欄の「仏教徒と基督教徒」は、どちらも、仏教の側からのキリスト教批判の独善性や卑劣さを衝いている。仏教の教義そのものへの敵意は、どちらにも認められない。ところで、あとのには、「仏者以為ラク基督教徒ハ至尊ヲ蔑視スト嗚呼何ゾ吾人基督教徒ヲ誣フルノ酷ナルヤ……普天ノ下皆王ノ民ニシテ率土ノ浜悉ク王土ナリ此国ニ住シ此国ニ安ズ然ラバ至聖陸上(上)下の誤植か。なお、「至……」のところから行が改められている)ノ民タルコトハ一日モ念頭ヲ去ラシムルコト能ハズ予等不肖ト雖トモ天子ノ尊榮ト嚴肅トヲ知ル豈之ヲ犯スコトヲ好マンヤ啻ニ好マザルノミナラズ誠心誠意之ヲ奉戴スルヲ知ル」というくだりがある。このような、天皇への忠誠を示す言葉は、ほかに、ときどき見受けられる。ただし、「天皇」とい

う呼び方は、ほとんどなく、右のほか、「皇帝陛下」、「万世一系の天子」などがある。一方、 \times 不敬 \times に当たるといふものは、あからさまなものとしては、ない。第二十五号の \wedge 雑録 \vee 欄にある、柏木義円の「友の米国に遊ぶを送る」のなかの、二箇所、○印の並べられている部分には、そのような文字が伏せられているのか、どうか。

第二十二号の \wedge 論説 \vee 欄の「基督教証拠論」は、「有神論」の立場からの「奇蹟」の「可有」性の「論証」、第二十七号の \wedge 論説 \vee 欄の「極端進化論者の惑を解く」は、「天賦平等自由とは人間終局の目的を撰択し或は拒絶する有意の能力にして決して他動物と同じ本能性より発達せしものに非ず」と見るところからする、人間についての「特別創造論」の「主張」。

最後に文学作品について、ひと言……。各号に和歌や漢詩が数多く見られ、また、僅かながら新体詩などもある。第二十二号からは、それら詩歌の作品のために、とくに \wedge 詞藻 \vee の欄が設けられている。また、その号には、 \wedge 小説 \vee という欄もあつて、そこには、「スミス女史作」の「最後の接吻」の訳が、「左の一篇は故ありて編者之を此欄内に載せたり」との前書きを伴つて、ある。中身は、亡き母についての思い出の記で、第二十三号の \wedge 雑録 \vee 欄の「愛する小女」における、「余の愛する……十歳の小女……アドケなき小童」のこと、および、第二十六号の \wedge 翻譯 \vee 欄の「ホーソルン原著」とある「結婚場裡之死鐘——The wedding knell——」における、若い「新郎・新婦」の物語りとともに、この雑誌には珍しく \times 柔らかかな \times ものである。ここには、全体の \times 硬さ \times に対する配慮が働いているようだ。左の「故ありて……」という「編者」の言葉は、そのような意図を匂わしたものでないか。——もつとも、さすがに、第二十一号の \wedge 雑録 \vee 欄の「読書論 二」で叩かれている「狼麩ナル稗史小説」の類い、それは、バイロソなどまでを、そのなかに含めているが、その類いの作品は、一つも出て来ない。

(吉田 恵)

第三十一号—第四十号

明治二十三年は、同志社にとって重要な年であつた。一月二十三日に、同志社の創始者であり総長であつた新島襄が逝去されたのである。『同志社文学』は、その第三十号に続いて、第三十一号(明二三・三)においても、新島先生追憶の情の切々たるものを感じさせる。殊に「詞藻」のはとんどが新島先生関係の詩歌によつて埋められていることは、目次に見られる通りである。中でも最も重要なものとして、彼が、青雲の志をいだいて、函館を脱出するときによんだとされている短歌を掲げておこう。

武士の思ひ立田の山紅葉

錦きすしてなとかへるへま

多くの新島追悼の文や詩の中で、わたくしは、浮田和民と徳富猪一郎兩人の講演を代表的なものとしてあげてよいと思う。浮田の追悼講演は、明治二十三年二月十三日に開かれた新島記念会において行なわれたもので、『同志社文学』第三十二号に掲載されている。(但し、この号の巻末の本院記事によると、当記念会の開催は三月二十二日となっている)「同志社の発起者設立者及び創業者」というのがその演題である。

徳富の講演というのは「徳富君演説ノ大意」として、第三十二号に載っているが、これは、三月三十日の夜、横井時雄の「欧米宗教事情」と共に行なわれた講演を要約したものである。

要するに、徳富も、先の浮田と同様に、新島先生をよく知る人であることは明らかで、先生の期待は、常に日本に

「ゴツイ」人の出ることであつたと力説している。つまり、各人個々が「毅然主義」を確立し、屈せざる剛健なるピューリタンの人民よりして、ナショナルキャラクターは成立するものでなければならぬという思想である。浮田は、先生を劉玄徳になぞらえたが、これに対して、徳富は、玄徳には孔明という師がいた、しかし、先生は自ら孔明の役をも果していたと、その業績をたたえている。

明治二十三年は、また日本の国家にとつても重要な年であつた。第一回衆議院議員の選挙が行なわれ、第一回帝国議会が召集された年である。『同志社文学』にこれに関連する記事を少しのぞいて見よう。

第三十六号に、「衆議院議員祝会の景況」という記事がある。第一回衆議院議員の選挙において、同志社社員の中村栄助、湯浅次郎及び教師坂田文平の三人が当選し、十月二十二日に、礼拝堂において、右の三人のために華々しい祝賀会が開かれたのである。「早朝より霽雨霏々不開裝飾委員幾多の期望も空とはなりぬ、門前に冠せんとせし「WELCOME」の球燈は移つて堂の入口にあり、堂前芙蓉峰を凌駕せしめんとせし幾百の紅燈は変じて堂内天井の四隅に揺々たり公堂の頂に飄々たる二疏の昶旗は満校の愛国心を表し堂内に飄々たる数十の国旗は自ら斯民を念ふの情を切ならしむ」という文からも、そのときの感激と熱気を十分に感じとることができる。

第三十一号から四十号までの中で、講演として出色のものは、エドウィン・アーノルドの講演(第三十九号)である。題名はなく、ただ、「エドウィン・アーノルド氏演説」となっているだけであるが、要するに、同志社の学生に与えたく学問のすすめくともいふべき内容のものである。

第三十七号の本校記事は、アーノルドの来京を次のような文で予告している。

エドウィン・アーノルド氏は本校特別講師の名義を以て来京せられ六ヶ月間当地に在留せらるる由なり其間には

多分本校に於て幾度も演説せらるゝならん氏の如き全世界に有名なる大家が本校に來られ幾度も演説せらるゝは本校に執ては此上なき幸福と申すべし

エドウィン・アーノルドは、『オックスフォード英文学必携』によると、ロンドン大学のキングズカレッジと、オックスフォードのユニバーシティカレッジを出たのち、一八五六年から、一八六一年に至るまで、ボンベイのプーナ大学の学長をつとめ、それから、『デイリー・テレグラフ』の社員になっている。有名な『亜細亜の光』（一八七九）は、彼がインド生活の期間中に練つた想にもとづいた長編詩である。

アーノルドの同志社での講演は、『デイリー・テレグラフ』の記者時代のことと、先の来京の趣旨にもあつた通り、六ヶ月間の滞在期間中には、同志社において数回の講演が予定されていたが、急用が生じて、帰国を余儀なくされたために、結局一回だけの講演にとどまつてしまつた。

その講演は、当時の同志社の教科内容に即して行なわれ、それらの各部門が如何に必要なものであるか、そして、それらをどういふ心がけをもつて修得すべきかを説いたものである。従つて、これは、当時の教科科目を知るよすがにもなる。彼の並べた科目は、(一)政治経済、(二)心理哲学、(三)理化学、(四)数学天文学、(五)地質及び生物学、(六)陶器学、(七)歴史学、(八)英語である。

陶器学があつて同志社にあつたことは興味深い。これに与えたアーノルドの言葉も面白い。彼は、この技術教育の美術的意義を特に強調しているようである。「余は理化学館に入り半製の陶器を見て之を喜ぶと共に更にこれより非常なる大美術家統々此校より出づるを望まざるを得ざるなり、有名なる近代の詩人ブラウニング一詩を草し人間は皆陶器の如く神の色々な器物に造られ、葡萄の美酒を盛る夜光の杯たらざるべからずと云へり。」といつて彼は、その

原詩を朗吟しているのである。

同志社に来て講演を行なった大物の中には、ほかに渋沢栄一がいる。明治二十三年四月二十四日に、礼拝堂において行なわれたその講演の内容が「渋沢栄一氏演説の大意」として、第三十三号に載っている。如何にも実業家らしい考え方で、彼は、学問をもっと、「有形的」な方面に推進すること、すなわち、理化学、或は商工学をさかんにすべきことを説いている。智徳兼備の実用的人物を養成することが、ほんとうに新島の教育理念であるという主旨である。

次に、論説の中から、最も学問的水準が高く、しかも、文学的見地から見ても、興味津々たるものとして、第四十号所載の「英聖書の英語及び英文学に於ける影響」をあげなければならぬ。稿者はケデーである。ケデーというのは、Chauncey M. Caddy のことで、彼は、明治十七年に、同志社英学校に専任教授として赴任した。英語及び英文学に及ぼした聖書の影響の研究は、彼がライフワークとしていたもので、この論文も、その研究の一端であると言えるであろう。

英文学及び日用の舌筆に最も多く引用される四大源泉は、聖書、ギリシヤ、ローマの神話、イソップ物語、パンヤンの『天路歷程』である。その中でも、聖書の影響が最も大きい。ケデーは、その論を、(一)その影響の事実、(二)その理由、(三)その例、という順序で進めている。

聖書が偉大なる影響力をもつ理由として、先ず文章が平易で、誰にでも解し易く、あまねく読まれていることがあげられるが、それだけでは、文学上の影響の理由を説きつくしたことはならない。もつと深遠高大な原因があるのだと、ケデーは言う。それを読む人は、それを神の言葉として感動する。「その之を読む熱愛已む能はざるものあればなり、その之を読む人心の最大要求を満し至難問題を解けばなり……」と。すなわち、英聖書の文学的影響は、そ

の宗教的影響を別にして説くことは不可能である、というのである。

彼は、次に聖書の影響をうけた大家たちの名をあげている。詩人に、「セキスピヤ、スペンサー、ミルトン、ポー、スコット、カウ(クー)パー、ウオールドウヨルス、テニソン、両ブラウニング及びロンゲフェロー」がおり、散文家に、バイ(ベイ)コン、アヂソン、マコレイ、カーライル、ラスキン及びロウエル」がおり、そして、演説家には、「ウエブストル、リンコルン」等がある。

これから進んで、ケデューは、ブラウニング夫人、ラスキン、ミルトン、テニソン、ロンゲフェロー等の詩と、聖書の文句とを比較しながら、実証的にその影響関係を明らかにしている。そして、聖書が古典傑作であることを唱えるくだりに至つては、歴史家のグリーンや、文学史家のG・セインツベリー、マコレイ、更にはハクスレイ等を豊富に引用して、その造詣の深さを發揮している。

ひるがえつて考えると、ケデューのこの稿が出た(明二四・一)のは、あたかも、日本において、宗教的にも文学的にも、聖書への関心が高まろうとしていたのと時期を同じくする。

ケデューが英聖書の影響力の第一の原因としてあげているその平易さは、そのまま日本語訳の聖書にもあてはめて言うことができる。

日本においては、新約聖書が明治十三年(一八八〇)に、旧約聖書が明治二十年(一八八七)にそれぞれ翻訳の完成を見た。そして、それは両者とも、まさに、日本語の古典傑作であったのである。日本語訳の聖書が、明治の文学に与えた影響の大きさは、今更とり上げるまでもない。しかも、明治二十三年には、植村正久が、『福音通報』や、『日本評論』によつて、キリスト教文学をひろめ、ミルトンや、ワーズワス、テニソン、ブラウニング等をキリスト教的倫

理観から論じて紹介した。『文学界』の人々や、国木田独歩がこの方面からうけた影響は甚大であつた。こういう潮流に照らして見ると、ケデーの論文は、一段と興味を増す。日本において、聖書を文学的な影響の観点から論じたものとしては、恐らく最初のものではなからうか。

同志社を代表する知識人の一人に浮田和民がいる。彼は、明治九年に同志社に入つた新島門下生の一人で、ラーネッドや、デヴィスに学び、十二年に海老名弾正、山崎為徳等と共に余科を卒業した。彼は、色々な文を『同志社文学』に寄せているが、第三十四号に、「英雄の商売替」という論文が巻頭を飾っている。

浮田は、ここで現代の社会における真の英雄たる資格を産業の世界において問うている。彼の言う産業とは、プラクティス、或は、ビジネスをさし、当時における実用的な理化学や、商経学唱導の風潮を反映したものと考えられる。

「地球は日々夜々に廻転し時勢は年々歳々に変遷す古の英雄は今の英雄に非ず昔の豪傑は需要の道塞がりて市価の下落亦甚しとす英雄豪傑も需要供給の天則に反る時は生涯瓦礫に異ならず亦是を一世の厄介物と云ふに過ぎざるのみ」

彼はこのように現代に通用しない英雄の例として、『膝栗毛』の弥次喜多と、セルバンテスのドン・キホーテをあげている。この対比は面白い。実用という尺度ではかれは、両者とも、まさに「一世の厄介物」というにふさわしい。現代における英雄たる資格は、精神と産業の両面にわたつてそなわつていなければならぬ。キリスト教の真理をさとするならば、精神と産業とは、渾然一体をなして、両刃の劔に異なることなく、国民を榮えしむるのである。こう見てくると、浮田の「産業」とは、勤勉な労働の意に解しても差支えないものであることに気がつく。彼は、結局労働の神聖さを説くに至るのである。ヘルムホルツ、ロツェ、カーライルを引くことによつて彼が示しているのは、こ

のことにほかならない。試みに、カーライルからの引用は次の通りである。

「蓋し作業の中には窮りなきの貴尊あり而して亦神聖あり何程愚昧にして自家高尚の天賦あるを忘るゝも現実熱心に働らく人には望あり怠惰の中独り断えざるの絶望あり何程拜金的なるも卑賤なるも作業は天然と交通するに在り実に作業を為さんとするの願欲は自ら人を益々真理に即ち真理なる天然の制度及び規制に導く可し……」(以下略)

(これは、カーライルの『過去と現在』第十一章の冒頭からの引用であるが、第十二章からも、あたかも章の区別がないかのよう
に引續いて引用されている。)

以上のような著名人による論説評論以外のものに、多少とも文学的かおりのものを求めれば、第三十七号の雑録に、「教授ハックスレイ氏と教授ドーンソン氏」というのがある。S・Sの署名がある。これは、ハックスレイとドーンソンの間に起つた宗教論争——特に『創世紀』のノアの洪水に関して——を要約したものだ、稿者S・S生の主眼は、ドーンソンの説(つまり、洪水物語肯定説)の紹介にあつたように思われる。

わたくしは、両者の間の議論の内容や、S・S生の紹介の態度よりも、彼が『第十九世紀雑誌』の名をあげていることに関心をひかれる。ハックスレイとドーンソンとの議論は、『第十九世紀雑誌』に載つた「教会の光及學術の光」というハックスレイの論文に端を發したものであつた。S・S生は、同じ第三十七号の雑録に、やはり『第十九世紀雑誌』から、フレデリック・ハリソンの「第二十九世紀のポンペイ」という小品を翻訳している。この『第十九世紀雑誌』とらうのは、*Nineteenth Century* に相違なく、坪内逍遙が、『小説神髓』を編む上におかつて、*Fortnightly Review* や *Contemporary Review* と共に用いた参考書として数えられているものである。恐らく、当時の英学生が、海外の文学的思想的動向を知る上の貴重な刊行物の一つであつたに違いない。

この文中に、「不可思議論者」という用語があるが、それは、ハックスレイの agnostic の訳語であろう。今日の「不可知論」は、当時はまだ一般的でなかったことが分る。

第三十一号から第四十号までの間に、文学作品の翻訳はわずかに一つしかない。ワシントン・アービングの『親子の情』という一篇で、第三十二号から第三十四号まで、三回にわたって連載されている。樵耕山人意訳とある。

『親子の情』というのは、『スケッチ・ブック』の中の『寡婦とその息子』(“The Widow and Her Son”)で、訳者は、「金玉訳して泥となす……余の拙訳は原文の妙意の千分の一だも写し出す能はざるのみならず往々誤謬あるを免れず」と、極めて遠慮深い断りを書いているが、決してそれほど拙訳とは思われない。試みに、篇中もつともパセティックな場面——生死不明であつた息子のジョージが帰宅して、老母と対面するあたりの訳を原文と照らし合せて見ることにする。

「私が今其物を聞く五六日前に、老婦は、食事の仕度に唄のものを取りに参つて居る内、戸口より一人の旅人が、しきりに園内を見廻はして居りましたが、身には水夫の服を着け、姿はやせ衰へ、色は青ざめてどう見ても病氣と苦役の為に、体を傷めて居る様子に見受けました。

暫らくして老母の園をの中に居るのを見付け、駆けよらんとしましたが、足はヒヨロ／＼として踏みしめる事は出来ず、漸くの事で、老母の前まへで来て、跪ひざましましたが、嬉うれしいにも、悲かなしいにも、先きだつものは涙。やつとの事で口を聞き

お母様／＼あなたは私をお忘れ遊あそびましたか？ 悴この「デオルヂ」を——
と覚えず後も又涙！此れぞ元は気高き誉を得た「デオルヂ」の憐あはれな果です、怪我の為と、病氣の為に身を傷め、

久しく見知らぬ国へ閉じてめられて居り共したが、終になつかしき故郷に、安き眠を得んが為め、進めぬ足を曳て帰つて来たのです。」

It swa but a few days before the time at which these circumstances were told me that she was gathering some vegetables for her repast, when she heard the cottage-door, which faced the garden, suddenly open. A stranger came out, and seemed to be looking eagerly and wildly around. He was dressed in seamen's clothes, was emaciated and ghastly pale, and bore the air of one broken by sickness and hardships. He saw her and hastened towards her, but his steps were faint and faltering; he sank on his knees before her and sobbed like a child. The poor woman gazed upon him with a vacant and wandering eye. "Oh, my dear! dear mother! don't you know your son? your poor boy, George?" It was, indeed, the wreck of her once noble lad, who, shattered by wounds, by sickness and foreign imprisonment, had, at length, dragged his wasted limbs homeward, to repose among the scenes of his childhood. ("The Widow and Her Son", *The Sketch Book*.)

右の訳文には二つの顯著な特徴がある。一つは、平易な口語体で、句読点を非常に規則的につけていることと、一つは、訳者がストーリー・テリングの呼吸を原作と実によく合せているということである。

『同志社文学』の第九号、第十号、それからとんで第十三号にアービングの『新郎の幽霊』の翻訳が連載されていることは、すでに紹介されているが、森鷗外の有名な『新浦島』(「リップ・ヴァン・ウィンクル」の翻訳)が出たのは、その一年あとの明治二十二年である。その頃、英語の教科書などを通じて、アービングがもてはやされていたのかも

知れない。

そして、樵耕山人の『親子の情』の訳文を見ると、どうも森鷗外の『新浦島』の訳文体の影響があるのではないかと疑いたくなる。森鷗外は、周知のように、明治二十二年から二十七年までの「しがらみ草紙」時代に、数多くの欧米の作家を翻訳紹介し、口語体文語体さまざまな文体を用いたが、『新浦島』には次のような口語体が用いられており、樵耕山人の文章との間に、或る類似を感じさせる。

ホトソンに沿うて登つて行つたことのある旅人は、屹度ケエツキルの山を覚えて居ませう。これはアパラツチエン山の幹から出た小枝で、遙かに西に向つて、仰いで見れば、麓は河の畔に垂れて、嶺は空に聳え、自づと近隣の地を支配して居ます。

樵耕山人がどういう人であつたかは知らないが、一人の文学青年が、その当時絶対的な魅力をもつていた森鷗外の翻訳文体の感化をうけたとしても少しも不思議なことではない。

シェイクスピアやミルトンをはじめ、かなり多くの英米の詩人の名がしばしばあげられているのに反して、詩の翻訳がないのはむしろ不思議なくらいである。ただ一つ、第三十二号に、『春の鳥』と題した下に、「英詩より訳す」というものがある。第四節までである中から、その第一節だけを引くと、次のような詩句になつてゐる。

百々千鳥 再び 帰り 来りけり 楽しき 調子 しらべつゝ 囀つ 鳴つ 喜に満て 歌ふ をだやかなる 春の身を切る 冬に かわりしを

撫花小史という人が短歌を数首つらね、それと並んでこの詩が出ているから、恐らく訳者はこの人であろう。しかし、原詩は何であろうか。後日折を見て調査を試みたい。

以上からでも分るように、『同志社文学』は、文学的内容は甚だ貧弱である。しかし、『早稲田文学』（明治二十四年創刊）や『文学界』（明治二十六年創刊）が出現するまでに、これが相当の号を重ねていたことは十分に誇るに価する。そして、これが心ある者には熱心に読まれていたことを証するために、正宗白鳥の言葉を引いておく。「私は明治二十九年の二月にはじめて東京へ出た。十八歳、日清戦争の終つた間もない頃で、読売新聞に紅葉が『多情多恨』を書いてゐる頃であつた。本当は、私は京都の同志社へ行きたかつた。当時新島襄は既に死んでいたが、私は故郷で『同志社文学』を愛読していたので、それが同志社志望を思い立たせたのであつた。」（中野好夫編『現代の作家』岩波新書、一八頁）

（松村昌家）

第四十一号—第五十号

第四十六号の巻頭に「本誌再度の改進」と題する編輯者の一文がある。

「想ひ起す、今を距る十年の昔、相国寺畔寂寥たる学舎の中、いと狭隘なる図書室の暗塵推裡に、文学雑誌と題する見る影もなき筆記雑誌の横はりしことを。爾来滿校の脳裡に鬱積したる磨筆練文の精神は漸くに熱度を増し、終に明二十年の春に至り、青草緑卉と共に世に萌え出でぬ。倩ら其迹を考ふるに、恰も是れ我同志社が多年敬愛する故摠長の方寸に存して、明治八年始て世の耳目に触るゝに至りたるが如く然り。爾來号を重ねる四十有五、月を閲る五十有四、第一号の誌尾に記名せし浮田松尾松浦の三役員より第四十五号の阪田松浦に至るまで、編輯に印刷に人を換え

しもの其数を知らず……」

と同誌の歴史をふりかえり

「本年一月、年の新なると共に紙上の面目を一新したり。客臘の本誌は其改良の期望を預告して云へり、……此度会員の内決に依り一步を進め、弘く社会公衆に播布するの好機に際会せり……」

として同誌の一般頒布にふみきつたところ、

「此大改良は大に内外の注意を惹き、須臾にして初刊と再版を売り尽し、……」
と其の発展ぶりを述べてから、

「今や本誌は一躍して同志社校友会の機関となりぬ。『会』の字を省て五字の誌名を四字となしぬ」とあるのは「文学会雑誌」を「文学雑誌」と改めたことであると考えられる。

以上は同誌の歴史を知る上に多少の参考にならうかと思ひ引用したのであるが、この文を読むと、当時関西においても、幾多の同人雑誌が現れながらも、多くは「流星的」に消えて行つた事情がうかがわれる。すなわち「基督教育年」(大阪)、「青年の手網」(岡山)、「青年学会」(松山)、「青年の光」(京都)、「愛の泉」(大阪)、「人間」(松江)、「青年思想」(熊本)、「知青年」(鳥取)等である。そこで

「然るに独り我文学会雑誌は、雑誌流行の時に動かず、雑誌廃滅の年に斃れず……」

となるのであるが、このように同志社文学雑誌が「精気鬱勃として着々歩を進めて」いた明治二十四年から二十五年にかけての時代は如何なる時代として同志社人たちにうけとられていたか。それを

1 国際情勢ならびに政治・思想

- 2 科学の発達
- 3 同志社の発展
- 4 文学

の四項目にわけて検討してみたい。ここで一言次のことについて付言しておく必要がある。それは、同志社文学雑誌には、右の四項目に入らぬもので、同誌にとつて最も重要なもう一つの項目があるのである。それはキリスト教関係の研究・論説である。私がこの分野を本論においてまったく採りあげぬこととしたのは、さすがに同志社のキリスト教研究は専門的であつて、門外漢たる筆者には取り扱いかねる点があるからである。これは本共同研究に参加された諸子の同感されるところと考える。同誌のキリスト教関係の論説については、別個に専門家の歛入れが必要であらう。これに比して、前掲の四項目に属する諸論文は専門非専門を問わず、数十年を経た今日、これらを読みかえずと、あるいは讚嘆し、あるいは微笑を禁じえない態の興味津津たる読みものとなつて、先輩の歩みこし道を教え、今われわれのある時代に想いをいたさせるのである。

1 国際情勢ならびに政治・思想

日清戦争を間近にひかえたこの時代は、当然のことながら、緊迫する東洋の情勢への危機感を訴えるいくつかの文を掲載せしめている。

石塚正治「現今日本青年の覚悟」(第四十八号)はこの種の烈々たる壮士調の檄文である。

「……我日本は今や将に一大渦濫の中に陥らんとす。請ふ耻を決して現今宇内の形勢を見よ。西には飽くことを知

らざるの英国ありて、東洋の商権を専らにせんとすれば、北には豺狼よりも猶ほ暴虐なる露国ありて、専心翼を我東洋に抔げんとするのみならず、今や泰西諸国の視線は悉く我東洋に集り来るにあらずや。……殊に露国は……一の港を有せざるが故に、……我東洋に向て之を索め居れり。然れば即ち、彼れが吃々としてサイベリア鉄道の工事を急ぐも、豈に亦怪しむに足らんや。」

と述べて、英が支那帝国をして露の侵略を防がしめる結果、英露の東洋での衝突は東洋を硝煙で焦がすだろう、もし幸に英露の衝突が避けられたとしても、朝鮮の如きはともも独立を保てまい、露国が港を求めて朝鮮をとれば、日本は「將に豺狼と交り、獅虎と座する」ことになるだろう。と述べた後、現今青年の中に真に憂國の志の少ないことを嘆いて、それに警告を發している。この檄文に呼応するように第五十号では、稻垣満次郎の演説「全世界に於ける日本の位置(大略筆記)」が三国同盟の推移を中心にヨーロッパの情勢を詳らかに説明したのち、やはり英露の衝突を予告し、その衝突の起る場所は日本であろうと言っている。それは英は香港では飽きたらず巨文島をとり、天津をつかんと北上の構えを見せ、露は千島樺太交換を行なったが、そのため日本の許可なくして太平洋に出れなくなっている、英も露も日本を考慮せずに事がなせなくなっているからだと説く。そして結論としてはやはり「若し邦人にして徒らに惰眠を貪り此大勢を利用する覚悟なき時は何等の恥辱何等の不面目ぞ」という警告になっている。

このように露国が惰眠を破る不安の黒雲としてクローズアップされているやさきに、もしこともあろうにその露國の皇太子が、滯日中に、日本の一巡査に襲撃され負傷する事件が起ったとしたら、それがどれほど震天動地の驚きであつたか、想像するだに余りある。

第四十三号では、この大津事件を重大視した「明治二十四年五月十一日」という巻頭論文が人目をひく。

「明治廿四年五月十一日はそも如何なる凶日ぞや震天動地の悲戯東洋の舞台に演ぜられたり彼の露西亜皇太子殿下父母の邦を去り遙々我邦を巡遊せらるゝの際京都を距る僅かに三里の地なる大津にて一巡査の傷くる所となる幸にして摂理の存するあり皇太子殿下の鋭敏なると車夫の忠働とによりて……抑今回の出来事たる僅かに一人の輕拳に出でしのみ然れども其及ぼせし影響……御遭難の一報先づ本国に達して其朝野を震動し歐洲列国に達して歐洲列国を震動し……願くは平安永久が日、露西国の上に在りまた普く各国の上に在らんことを」

外国を相手にいまだ国難突破の経験を持たなかつた日本の、しかも当時の情勢においての驚愕ぶりがよく読みとられる。筆者はつづけて、「立憲政体各国外交通の今日に於ては全く昔日と異なり一個人の行為は其影響を一國に及ぼし、其震動世界に普及する」ことを教え、「我等目を覚して広く世界の大勢を察し深く事理に通ぜざるべからず」「一夫百世を乱るの古語を實踐せしむる勿れ」といましめ、「国民的道德の輿論を振起せざるべからず」と説き、「大久保利通の暗殺といひ森文部大臣の狙撃といひ大隈伯の負傷といひ大人豪傑を殺害することなほ犬豚を殺すが如し何ぞ人命を重ぜざるの甚しきや」と嘆いて、「國に忠なるは必ずしも敵を悪むにあらず真正の志は真正の愛に在り愛は凡ての恐を除く」と述べているのはその後の我國の歩みを省みても注目に値する発言である。そしてここに愛を説く同志社のキリスト教精神が輝いて見える。第四十三号の「記事」の欄には、小崎校長及生徒代表が皇太子御旅館に御見舞をし、十六七の両日、毎夕殿下のために臨時祈禱会が行なわれたことが報じられている。

さて、右の論文に「國に忠なるは」とあるが、忠の精神と同志社のキリスト教精神との関係は当時どのような理解されていたのか。これはここでのわずかの論文のみによつて語らるべき性質のものではない。しかしその片鱗を知らしめるものとして、第四十一号にある「我党の尊皇主義」という沢本虎治の論文は見逃すことができない。その中心

思想を拔萃すると左の如くである。

「我国ハ此広キ輿國ノ長キ歴史ニ比類ナキ、惟一無二の皇^{ミカドスニエンパイアー}國ナリ、其人民ガ皇室ニ対スル忠愛心ハ是此皇國ガ其長日月間ノ歴史ニ於テ鍛鍊セル所ノモノ也而シテ吾人モ亦此歴史ノ裡ニアリ、此鍛鍊セラレタル一分子也、我党ガ皇室ニ対スル忠愛尊奉ノ度、豈我同胞兄弟ニ譲ラン哉、只信ズル所異ナレバ其道モ異ニ、其道異ナレバ從テ其手段變ズ、我党ノ尊王主義ガ世俗ト相合ハザルハ固ヨリ怪ムニ足ラズ、……吾人ハ王者ヲ以テ神トシテ之ヲ崇ムル能ハズ、器具トシテ之ヲ用フル能ハズ、只吾人ハ立憲國ノ大元首、主権者、統治者、國民ノ代表者、交際社会ノ最長者、道德社会ノ最長者、億兆人民ノ最愛最慈ナル父母トシテ之ヲ見、智識ニ依リ、道理ニ依リ、我自主ナル良心ニ從テ、敬愛忠実ノ心ヲ以テ之ヲ尊崇奉戴スル也、……」

沢本の反駁文は終始理路整然たる名文であつて、もしこれに一言半句の註釈なりと加うるものは、駄足のそしりを免れない。

キリスト教精神と尊皇精神との關係を明快に定義した右論文とならんで、やはり第四十一号に特筆すべき一論文が見出される。小野英次郎教授の「工業の進歩と道德の変遷」である。この論文は、工業の進歩、産業機械化の時代が到来し、資本家と労働者の階級が生じ、これが社会問題となることを予言したものである。未だ日本においてはその兆候は僅かにしか感知されないが、欧米諸国においては問題が深刻であることを説いて、やがて日本にもそうなる日が来ると警告する。そしてそのような新時代が、旧来の社会より望ましいか否かの点については、肯定的であり、ただ

「社会進歩の勢は猶大河の流るゝが如し能く其流勢を治むるあらざれば禍害を生ずること少からざるなり工業社会

の変遷に因り社会全局に及す結果著しく労働人の蒙る地位境遇の異動甚たしきが故に能く大勢の赴く処を洞察して之を制御せざるべからず歐洲に於て現今労働者の困難甚し然れども其甚たしきは過去に於て施政の方針其宜を得ず生産社会の組織完からざるが故なり此の組織を改良し将来社会の安寧幸福を増進するの勢力は何物ぞ現今の經濟学者は答て曰く国家、宗教、學術の三にありと」

と結んでいる。社会の安寧幸福を増進するものは、国家、宗教、學術であるという結論はいまだ樂天的でユートピックな段階にあると評されるかも知れないが、文中、労働者の人間疎外とそれに由来する道德の問題を論じ、労働時間や爭議の問題、ヨーロッパに起りつつある新思想の問題等を論ずるその論調は、この解題に包含される各号のすべての論文中、もつとも論理の展開が的確であり、文体も精鍊されており近代的でさえある。この論文を特筆すべきと言つたのはこの意味においてである。そして『同志社文学雑誌』と言つた際の文学という意味は、いまだ文芸そのものを指すのではなくて、広く學問を意味するとき、たとえ比較文学的立場から同誌を研究するにしても、狭く文芸の部門のみを漁つてみても大きな収獲が期待できないのに反し、むしろ社会科学、自然科学をとわず、その発想の仕方、論理の運び方、そしてそこから結果として取り入れられる文体の様相、用語の変遷を調べてこそ、西洋思想移入期の日本における真に比較文学的な研究成果が得られるのではないかと反省させられるものがある。

2 科学の發達

『同志社文学雑誌』には多くの自然科学關係の論説が見られる。現在これらの文を読むとまったく今昔の感にうたれ、興趣つきぬものがある。この解題の冒頭に「あるいは微笑を禁じえない態の興味津津たる」と言つたのは主とし

てこれらの文である。号を追つてその要目を記すと次のようである。

「太陽系統之行末」村上春太郎（四十二号）

太陽の熱についての諸説を紹介し、やがてそれが冷却する運命にあることを告げ、

「苟も此等の議論ヲシテ正鵠ヲ失セザラシメン乎吾ガ地球ヲ始メ太陽系統諸遊星ノ行末ハ実ニ悽愴哀傷ノモノナル哉」

と「世界ノ死」を予言している。

「電気——写真」南風子（四十二号）

「写真術ノ進歩ニ驚クベシ、鋭敏ナル早取器械ヲ用フル時ハ野外ノ景色ノ如キ僅ニ一秒時ノ五十分一以内ニテ充分撮影スルヲ得ベク走馬帆船汽車等ノ如キモ……」

ではじまるこの論説は大真面目でユーモアにみち、秀逸である。

「近來米國ノ一士人ハ電気ト写真術トヲ利用シテ盜賊ヲ退治スルノ法ヲ工夫セリ今其要ヲ上グレバ……」

という下りは抱腹絶倒ものであるが、

「近來ハ又実物ノ彩色ヲ其ママ写真ニ取ルノ方法次第ニ研究セラレ其手掛カリモ……」

と、はやくもカラー写真の到来を予告していることが注目される。

「水星經過及ビ皆既月蝕」村上春太郎（四十三号）

「今日の化学」拔萃 南風子訳（四十五号）

「今より五年前大英科学協会開会の節化学部長の資格を以て化学進化論を称道したるウイリアム、クルックス氏は

本年五月フヤールラム紙上に此題を以て通俗の一文を投せり即ち其一小斑を摘訳す」といふ翻譯であつて

「カーペンター氏は食物の種類を三分して(1)澱粉質類(2)脂胞質類(3)蛋白質類となせり而して其蛋白質類は吾人が脳髓神経等の貴要なる部分に寸時も缺く可からざる者にして……」
ではじまる。

「地球内部の状態を論ず」村上春太郎(四十七号)

「地震畧説」鈴木達治(四十八号)

「地中之空気」栗生光謙氏講演(四十九号)

「アルミニウム」南風子(四十九号)

「第十九世紀の終りより第二十世紀の曙光を臨んで世に紹介されんとする金属あり名けてアルミニウムと云ふ」といふこの紹介文は隔世の感を深くする。

この他にも自然科学に関する記事は多く散見される。

3 同志社の発展

同志社発展の歴史を調べるとき、この『同志社文学雑誌』は貴重な資料を提供するものであることは特筆しなければならぬ。この意味で今までこの雑誌の整理研究がなされていなかつたことはむしろ驚異でさえある。

明治二十四年から五年にかけて、同志社にとつて忘れることのできな大きな出来事が三つある。それは波里斯理化

学校の開校と同志社政法学校の設立と記念文庫の開庫である。波里斯理化学校の開校は現在の工学部に先鞭をつけるものであり、同志社政法学校は同志社大学設立の大理想への第一歩であり、記念文庫の開設は現在の同志社図書館の草分けである。

波里斯理化学校

理化学校の開校式について第四十一号の記事の欄に

「理化学校の開校式は来月(四月)七日執行する筈なり其前日には一般人民の縦覧をも許す都合なりと聞く」と報じている。そして第四十二号の巻頭文として「波里斯理化学校開校式を挙ぐ」の文がみえる。この一文には下村教頭の語つたところをもととして、理化学校設立の動機と経過がくわしく述べられている。創立者米國コンネチカト州新倫敦(ニューロンドン)の老紳士デュー・エヌ・ハリス氏の高邁な人格と、氏がいかにして日本の同志社に理化学校設立のため寄附を思いつたか、それを同志社の教授議会がいかに受けて立つたか、その事情がよく理解される。そして

「我校学生の多数、已に哲学文学等想像の学を熱愛す。而して我国現時の青年は最も国家学に傾意す。彼等は皆理化学を思はず、製産的の学問を悦ばず。此中に在て此校の起る、小にして同志社に、大にしては日本社会に及ぼす所の影響尠少なからざるべきを知るなり」としている。

また同じく第四十二号の巻末には理化学校開校式の詳細が、第一外観、第二開校式、第三餐応、第四ハリス氏の書翰、第五演説、第六祝文、第七縦覧にわけて記載されている。

同志社政法学校

『同志社文学雑誌』の広告欄は種々の意味で非常に興味深く、これを調査するだけでも意義なしとしないのであるが、この広告欄(第四十五号巻末)に次のような生徒募集広告がある。

同志社生徒募集広告

予備学校

式百名

内 補充科生 五拾名
予備科生 百五拾名

普通学校

(第一等級は三十名 第二等級以上ハ
幾名ニテモ満員迄ハ入学ヲ許ス)

神学学校

(幾名ニテモ満員マデハ入学ヲ許ス)

理化学校 (四十名)

政法学校

ハ来ル九月ヨリ
新ニ開設ス

(定員四十名)

右来ル九月八日午前八時ヨリ入学試験ヲ施行ス 志願書ハ前日マデニ当受附所へ
申込アレ

明治廿四年八月

京 都 同 志 社

それと並んで政法学校の広告には、二十四年九月八日開校予定で、同志社大学設立の着手第一歩として先ず政治、経済二科の専門部を設け、四十名を入学せしめることが明かにされている。そして第四十三号の巻末に「同志社政法学校第一回報告」なるものが掲載されており、その冒頭に「大学教育の目的」として、大学は教育と研究の機能的二

側面があることを明確にしたのち、

「我国に於ては輓近高等教育の進歩著しく法律政治経済等の学科は是を専修する学校少からずと雖も独り帝国大学を除けば概ね泰西輸入の學術を教授するに止まり學術上独立の研究調査を遂げ新知識を發明して国運の進歩を助くるもの未だあることなし」

と言ひ

「然れども大学の設立は莫大なる費用を要するものにして到底一人の企て及ぶ所に非ず……我が同志社の義捐金は未だ六万五千円に達せず此の輕少なる資本を以て大学を設立せんとするは名実相伴はざるの事業たるを免かれず故に余輩は著しく事業の区域を狹隘にし此の狹隘なる区域に於て大学教育の目的を達せんとす即ち政治理財の二学科を設立し此の二学科に於て博識なる教授を聘用し……余輩は斯くの如く先ず一部を完成し資本の集るを待て尚ほ法律の一科を加へ政法学部の大成を期する者なり……」

としている。同志社大学の設立はここに第一歩を踏みだしたわけである。また「教授法」の項では、近世欧米で採用されている「セミナリー・メソッド」(研究会)なるものを採用して、教育制度に新面目を与えることを宣言し、このゼミナール方式についてくわしい説明を掲げている。

この文のほかに、第四十七号の小崎弘道「同志社政法学校設立の始末」は、明治十六年七月にはじめて私立大学設立の壮志を公表して以来、遂に政法学校設立に至るまでの曲折をくわしく説明している。

紀念文庫

小室沢辺紀念文庫の開設は現在の同志社大学図書館の始まりである。これに關しては第四十七号に、浮田和民「紀

念文庫開設につきて」がその理念と意義について述べ、同号の「小室沢辺記念文庫開庫式」という記事が小室信介、沢辺正脩両氏の小伝を掲げており、また同号に小野英次郎は「歴史的思想の発達を論じて記念文庫に及ぶ(略載)」の一文を載せている。

以上の二つの学校の設立と図書館の開設はこの時期における同志社発展の三つの大きな柱である。現在の同志社に特に関係深いものとして、特に頁をさいた所以である。このほかに注目すべきものとして、第四十一号の「記事」の欄に、「京都論と東京論」というのがあり、政法学校を東京に置くか京都にするかについて、相当激しい学生の運動があつたことが覗えるし、同志社で教授されていた外国語について知るためには、第四十六号の「記事」に「同志社の外国語」として、

「従来の英語と独逸語(普通校の受持はオルブレクト氏、理化学校は栗生光謙氏)の外此度神学校に始めたる希伯来語(湯浅氏)と希臘語(スタンフォード氏)及び政法学校の仏蘭西語(ビール氏)を合せて都合五国語となれり」と記されている。

4 文 学

『同志社文学雑誌』には、文芸関係のものとしては論説、随筆、紹介、伝記、漢詩、新体詩、長歌、短歌、俳句から今やうにいたるまで多彩な収録がなされているが、第四十一号から五十号までには、小説は一篇も見られない。戯曲はもちろんのことである。このうち比較文学的に採りあげねばならぬものは、論説と新体詩であろうかと考えられる。ことに新体詩については、同志社が生んだ大詩人湯浅半月と、その後輩で明治二十二年に同志社を卒業したばかりの

雲峯磯貝由太郎の二人が如何なる寄稿を残しているかが、主たる興味の対象となる。そして第四十九号に、われわれは湯浅吉郎の「はかまいり」と題する新体詩を発見し、この墓が山崎為徳の墓のことであることを知る。明治十四年わずかに二十四才三カ月で長逝した山崎為徳が同志社で教鞭をとっていたときに、半月はその影響をうけた。この間の事情については衣笠梅二郎著『十二の石塚管見』にくわしい。山崎に心酔していた半月は、自ら敬愛する青年教師を失って悲しみの余り、まさに同志社が全滅したように感じたという。そしてその死を去ること十年目に、半月は

夢ともつかず朝な／＼、心にかゝるしら雲の、山松うづむ若王子、峯の御墓に手向んと、おく露ながら秋の野の、尾花しら菊手折しも、いづれかよしと定めなく、……

感慨無量に花を手にして辿りゆくのであるが、逝きし師を懐ううつろな心には辿る道さえ定めなく

ゆけばか路のまどひけん、彰栄館の時計台、鐘の音遠し鴨川の柳が下の疏水橋いつ渡りけん、黒谷の岡ともしらずゴソゴソと

落葉をふみわけてゆくと、いつしか師の墓の前で。

君が名をみるをりしもあれ、涙とめあへぬ袖の上に散りくる木葉二ツ三ツ……

この気高いばかりの真情の切々たる吐露は一読して人の心を打たずにはおかない。明治二十年代において、ようやく新体詩は軍歌調や方便詩の域を脱して芸術的純粹詩として確立される。しかしまだ明治二十四年、第四十一号から五十号にいたる『同志社文学雑誌』に散見される新体誌には芸術的とは評しがたい段階にあるものが多い。その中に

あつて、半月のこの詩はさすがに「はかまいり」という師の十回忌を記念する一種の目的詩でありながら、純粹抒情の透明さをたたえて光っている。なおこの詩篇につづいて故山崎為徳の和歌二首と漢詩三篇が収録されている。

次に磯貝雲峰については、第五十号に「大磯湾上又今年」という文が発見される。雲峯は十八年に同志社に入り、二十二年卒業、二十八年渡米まで京都、名古屋に教鞭をとり、『女学雜誌』『国民之友』『同志社文学』等に寄稿していた。その代表作は『女学雜誌』に掲載された『知盛卿』であるといわれるが、その才能を惜しまれながら三十二才で夭折した。彼の作品はついにまとめられて一巻の書とならなかつた。新体詩による叙事詩人であつたと言つてよからう。「大磯湾上又今年」という文は抒情詩でもなく叙事詩でもない。これは偉人新島襄の二回忌にあたり、その死をいたみその偉徳を讃えた散文による文章である。しかし

往時悠々只夢に似たり、今時茫茫亦夢中の如し、

に始まるこの文は、むしろ散文詩を読むような感を与える。そして恩師を古今の英傑に比べ、とくにルーテルの「百万の大軍をも尚恐れざるの勇」に比して讃えるその雄大な文想にはやはり叙事詩人としての面目が覗えるような気がする。

右の両者のほかに、新体詩らしきものをあげると、第四十五号に無記名の「同志社学校の歌」、第四十九号に橋本嘯月の「親睦会席上にて」、同じく天遊子の「夕暮」、第五十号に某教師戯作として「ニュートン」などがあるが、中でも橋本嘯月のものは別に散見せられる和歌とともに文学的にすぐれている。なお以上を通じて見るに、新体詩は明治二十四年には前半より後半に集中して現れていることも看取される。

さて新体詩について考えるとき、この時期に特に興味ある現象は、いわゆる古来の長歌と新体詩との混同が明瞭に

現れていることである。太田三郎氏は「近代日本文学における外国文学の影響」(河出書房)の中の「ヨーロッパ系文学との接触初期」の中で

「詩抄」の感化によつて発達してきた新体詩に二種類が生じている。一つは、長歌の再興と称すべきものと道行き風の雅文に倣うものとであつた。これは久米幹文が『詩抄』の後がきを記して自ら暴露しているところであるが、新体詩のもつ内面的意義をとらえぬ国文学者の意図につながるものであつた。今一つは『詩抄』の示したあたらしい時代の思想と感情との表現に従うものであつた。」

と述べているが、この国文学者による新体詩に対する誤解と、長歌再興というアナクロニズムが『同志社文学雑誌』にも堂々と顔を見せている。それは第四十三号にある大谷音次郎の文であるが、史的に重要であると思われるので、少し長くなるが次に引用する。

長歌に就て

大谷音次郎

一日本校和文講師松山氏を訪ひ談我國文学の事に入る先生曰く長歌は山城の京となりて衰へ其格も乱れ見る甲斐もなくなりたれど、昔時は歌とし云へば長歌にて其格も正しく其姿もいと美はしかりき、疊句、聯疊、隔疊、対句、隔対、招応、喚響、譬喩、序辞など言ふべき格式ありて燦爛たる光輝を発てり今の人は此等の格式あることも知らず格に言句を長く並べ立つるを長歌と心得居るものゝ如し然れども徒だ言葉を並べたるのみにては歌とは云ふ可からず格も無く調もなく綾もなくして言詞を並ぶるは譬えば楽器を譜調に合せて徒鳴しに鳴すが如し音のみ出でたりとて何でか音楽とは云ふべき歌も亦然りと由て左の一詠を示さる……今同氏に乞ふて茲に掲げ日本文学に缺く可らざる長歌の
其実如何なるものたるかを示さんとて……

東京なる本郷会堂の初開を祝へる歌並短歌

松山高吉

やすみし、わが大君の、たり御世を、まし足らはして、春花の、さかゆる如く、秋の葉の、にはへる如く、日のもとの、光にほひて、八州国、民さかゆきて、たまちはふ、神の恵を、頌ふらん、時見まほしと、朝はふる、風をもしのぎ、夕はふる……

……………

光かゞやく、この殿の、救ひの光、との宮の、恵の露に、武蔵野の、野ずゑの草も、なべてもれしな、

築きたつる殿の御柱うごきなく

民の救ひのもとこそなれ

このように最後には丁寧短歌が附せられている。長歌はこの文にみられる一篇にとどまらない。右の文に呼応するように、第五十号には「長歌並短歌二首」として高吉の作品が掲載されている。このような長歌再興の気運は、新体詩に対する無理解から来たものであるが、一方には、明治十年代から二十年代にかけての欧化主義の反動としてみられる、二十年代から三十年代にかけての国粹主義の抬頭による復古主義に大いに関係があるであろう。それを裏書きするように、長歌のみならず、第五十号には担庵居士の「今やう四首」などが発見されるのである。

論 説

文芸に関する論説については、次の四つものが特に注目される。そしてこの四つの論文が、計らずもそれぞれ、一、中国文学論 二、米文学論 三、英文学論 四、一般文芸論 と称してよい内容を持っていることは、当時における外国文学の受けとり方と文学のあり方に対する考えの一端を示すものとして重要である。ただいづれも、比較的

短い文章であり、内容的にもあまり深くないのが残念であるが、それはそれなりに当時の文学の理解度を示すし、ことに四、一般文芸論にあたるものは、『小説神髓』が世に出てから間もないものだけに大いに問題としてよいものがあるうかと考えられる。今、中国文学論、米文学論、云々と名づけたのは私の勝手な仮称によるもので、実際の標題は次のとおりである。

支那哲学の一大欠点	(中国文学論)	木村鎮太	(四十一号)
米文学とエモルソン	(米文学論)	美軒小史	(四十二号)
英文学の特色	(英文学論)	魔々子	(四十八号)
文章の三要素	(一般文芸論)	松浦政泰	(四十九号)

支那哲学の一大欠点

木村鎮太

筆者は「支那古来哲学者多し然れども若し其粹の粹なるものを挙ぐれば」老子、孔子、韓非子の三賢につきると筆をおこし、まず老子についてはその厭世の思想を指摘する。すなわち「天下皆知美之為美斯惡己、……」の項を引用して、「是れ老子道德の標準と云ふも不可なかるべし更に其理想の社会を抽けば」として「小国寡民……隣国相望、鶏犬之声相聞……」の項を引用して、「徒らに厭世者となりて山林幽谷に閑退せしことを」恨み、「其法律を重ずるは則ち可、其道德を軽んずるに到ては則ち不可」としている。そして孔子については「道を説き違々席暖なるに暇あらざりしは遙かに老子に出づる数等」で「到底韓非の解し得べきことにあらず」と考えられるが、「然れども孔子修身の結果は実に憂愁にありし也」とし「又孔子に解すべからざるは苦なり死なり而して常に之を失望の中に断じ去る」

と評し、「以上論ずる処静に之を察せば一大欠点自ら知りぬべし則ち全能至愛の上帝を認めざる是なり……失望！暗黒！冷笑！利己！此種の性質何ぞ夫れ支那文学に多くして西洋文学に少きか哉」と結論している。ここに明治初期の漢学対洋学の優劣論の一端が提出されており、筆者は漢学こそ日本近代化と国民教育のために採用さるべきことを述べていると考えてよいのであるが、それだけではなく、「則ち全能至愛の上帝を認めざる是なり」としているのは、すなわちキリスト者としての理想を明確に打ち出していることになり、漢学（西洋文学）の根本がキリスト教精神にあるという新島襄の根本的指導精神に則った信条を披歴しているわけである。すなわちこの論文は漢学に対する漢学の優位を主張すると同時に、東洋哲学に対するキリスト教精神の優位を認めよというのである。そしてその根底には開化期としては当然のことながら、文学を国家建設・国民教化のため必須のものとみる態度が厳として存在する。さればこそ「明治の日本又一種の春秋戦国と謂て可なり」として、陰險、詐偽、不義、淫乱の横行する社会を憂うことになる。キリスト者の壯士愛國の文学論であり、漢学対洋学優劣論の見地から興味ある一文である。

米文学とエモルソン

美 軒 小 史

この論文も一種の愛國文学論であることで、前掲の中国文学論と軌を一にするものがある。「支那哲学の一大欠点」では「唯独り基督を見るの日夫れ何の日にかある」と結んでいるが、この論文の結末は「世はコンコルドの哲士其人を待てり」と我國にもエマーソンの如き偉人の到来することを望んでいる。論文の要旨は、米國は独立はしたが、文学的には英國の属國であつた。しかし一八三六年より四十年に亘り、エマーソンの筆頭花開くに及んで、はじめて文学上の独立宣告の時とすると述べ、「彼れは昔に熱心國粹を主張して新國民の代表者たるのみならず、又更に共和政治的の進歩論者なり」と評すが、エマーソンの眞価は特にその人格の高邁さにあると説く。「其著を読むもの、其

の思想のみを読まず、其の品格を読むなり。其の智に感ずるのみならず、其徳に化せらるゝなり」とし、「文学上千九百九十年代の日本は、猶千八百三十年代の米国の如し。乱雑極まれり、浮華極まれり、世は『コンコルドの哲士』其人を待てり。思想高潔にして一国風靡の力ある人を待てり。」前掲論文では明治二十四年は春秋戦国であり、此度は一八三〇年代の米国に比べられている。徳義の頹廢を嘆いて国を憂い、思想の貧困をその弊因として、西洋思想を以つてバックボーンとすべきことを説く点で、両論文は一致している。

英文学の特色

魔々子

これは前二者の如き論文らしい体裁をとつたものでなく、ほとんど簡条書きにされた覚書程度のものである。「文芸瑣談」の中に含まれており、「第三 英文学の特色」となっている(第四十六号に前稿として、第一のOpusとは何の義ぞや、第二、古代の詩聖と近世の歌仙、というのがあるが、半ページ余りの短文であり、重要性に乏しい)。その簡条書きにされた英文学の定義は次のようなものである。英文学は

① 基督新教国民の文学なり。② 智識のみの文学にあらず、又力の文学なり。③ 能く権衡を得たる文学なり。④ 自由主義の文学なり。⑤ 平民的の文学なり……以上①④まで。

以上に見られるような、直截的でかなり主観的な文学の受けとり方は、当時の日本の状況が西洋文化に何を求め、如何なる態度で望んでいたかという一側面を知らしめる。と同時に、前掲の二論文と併せて、同志社には同志社としての文学の受けとり方があつたのだということ、そしてそれは見事に創立者の建学の精神に沿つておりそれに密着したものであつたということが知らされる。誠にこの時代は新島精神の許にすべてが結集され、一丸となつて一つの高い理想と気概と自負に充ち、それが隅々までを引き締めていた時代であつたのであろう。この文学雑誌の他のすべて

の論説や記事からもそのことが痛切に感じとれるのである。

文章の三要素

松浦政泰

第四十一号より第五〇号までにおいて、文学的な論説としてもっとも内容充実し、問題を含んでいるのはこの論文である。なぜならば、『小説神髓』が世に出てから五年目にあたる明治二十四年という新文学抬頭の時期にあたって、もっとも古い歴史を誇るこの文学雑誌の中に見出される唯一の文学作法であるからである。この論文はまず、文学をなすには、次の三つの要素を心にせねばならないと説く。三つの要素とは、精神と作料と修辭である。そしてこの精神とは意の活動の結果であり、作料は智の給するところ、また修辭は情の进出するものに他ならない。すなわち智、情、意の三つを満足させる、精神、作料、修辭というものがなければ満足な文は創れないわけである。これを英語で表現すると、精神は Spirit、作料は Matter、修辭は Form ということになる。また漢語で表現すると、氣、意、辭であるという。

精神が文となすものに必要なのは、文章はいわば筆の演説であるから、自ら感動してはじめて人をも感動させうるのであり、骨なき演説が唯一坐の欠伸にすぎないように、自ら感じ自ら泣くに非ざれば読者を動かすことはできない。「筆を下すの時、自ら捧腹絶倒せざるべからず……自ら濡れにぞ濡れて双の袂を絞らざるべからず」として、サツカレー、薜峰、露伴を引き合いにだしている。そして「余は強ち現実派の取る所を唾棄せず、然れども幾分の理想其中に埋伏せざれば世を進め人を進むるに於て効益なしと信ず」と写実主義を容認しながらも、そこにおける理想の欠如を指摘している。この年に逍遙と鷗外の間交された「没理想論争」と想い合せてみる必要がある。そして「何ぞ我神聖なる明治の文壇場を挙て、夫の腐魂爛腸の無骨漢の蹊躑に一任する」と悲憤慷慨し、「嗚呼実には真正の文学家

たる者は又真正の道徳家たるべき哉……真文を属せんと欲する人は、徳義を練り品格を修めざるべからず」と説き、バイブルが泰西文学中で高地位をしめているのも宜なるかなとしてゐるのは、前掲三つの論文と殆んど同じ軌道の上に乗った、キリスト教的精神主義の上にたつ文学論と受けとることができる。同志社には同志社らしい文学の解し方があつたのだということが、この論文でも明瞭に証することができるのである。

次に作料にいたつて、この筆者はリアリズムを主張する。そして他人の模倣をやめて観察によるべきことを慫慂する。「万有は実に我一大智庫なり」として「慧眼鋭眸活社会の真相を看破し、人情の粹処を嚼味して得る所の実験的知識も、文材思料の一大源泉たり」社会といい、人情といい、実験的知識という言葉を用いてゐることは、ここに明瞭にリアリズム(模写)の理論をとり入れていることがわかる。「我等宜しく全社会の至大より人情の至微に至るまで靈敏なる観察を凝して幾多の真理を発見せざる可らず」といい、その観察に加えて、美術家、哲学者、科学者を訪ね、耳に得て脳に貯うるの要ありと説く。ここに至つて、理想主義と現実主義とが一見矛盾なく結合させられてゐる。すなわち精神には理想をもち、それを肉づけするには観察による写実をもつてせよというのである。

最後に「修辭」の項で「オリノコ河畔の美婦人は身に片布を纏わずして外出するを意とせざるも、尚紅粉を施さずして人に接するを躊躇するにあらずや」として、明比、暗比、対照、疑問、漸層などの修飾を用いるために、修辭学、殊にその修飾論を研究せねばならぬと説き、古今の名文の実例として、「諸君が日夜愛読する所の聖教」より、二三の文例を引用している。小説作法として修飾を重んぜよというこの主張を明治二十四年という年に位置させるとき、それは外国文学の手法を採り入れよという意味で新しく、自由なるべき新文学に修辭学を奨める点で古いわけである。ただこの論でいう文章というのは、かならずしも小説の意味ではないのであつて、筆者も「近時我国文学海の

潮流は一方にのみ進りて、人をして文学は即ち小説なりと思はしむるの傾向あり」と言っている。しかし全体を通じて見れば、これはやはり小説作法の一試論であるとの印象がよい。

以上四つの文学論は既に指摘したように、同じ尾根の下に培れた同系異種の論文である。それらを貫いて流れるものは新島襄によつて代表されるキリスト教的人道主義である。西欧影響の他の三つの潮流、すなわち三田派の功利主義、フランス学派の自由主義、独逸学派の国家主義とならんで、明治初期の一つの時代精神を代表する新島襄のキリスト教的精神主義、そしてそれを受けつぐ人々は、文学の理解においても、一方に澎湃として起りつつある現実主義に飽きたらず、むしろ次の時代において青年たちをとらえることになる主情的、理想的文学への方向を指向する趨勢にあつたと言ふべきであらうか。

以上をもつてこの解題を終るが、この文学雑誌には、当然のことながら、創立者新島襄に関する多くの貴重な論文や記事があることを忘れてはならない。しかしこれらはこの雑誌全号を通じて、あらたに吟味さるべきもので、一部分の解題で取扱ふべきものでないと考えたので、後日の宿題として保留することとした。

(店 村 新 次)

第五十一号—第六十号

1 明治二十五年という時代

私が解題として担当した巻は、『同志社文学』五十一号から六十号までの十巻である。もつとも、五十三号までは、『同志社文学雑誌』と標題し、同志社文学会発兌となっている。五十五号からは、発行所は同志社文学社と変っているが、その組織上の相違をつまびらかにしない。ただ標題が変つたからとて、にわかはその内容までも一変した、ということはないようである。これを期間からすると、明治二十五年（一八九二年）二月二十日から、十二月二十日まで、この頃における『同志社文学』がどうであつたかを見るまえに、この時代の中央の動向を管見しておきたい。そうした日本の文壇、思想界の動向の中で、『同志社文学』がどのようなはたらきをなし得たかを確認せんがためである。

この頃文壇を賑わしていたのは、なんといつても明治二十四年九月以来の没理想論に關しての森鷗外と坪内逍遙との間の論争である。そもそもこれは明治二十三年の逍遙の「小説三派」という評論をめぐつての論戦であつて、文壇にはそれぞれ流派があり、一方の派の標準で他派を非議するのは酷であり、各派それぞれの特長によつて活動すべきだといふような、客観主義的な、常識的な文学の価値判断を逍遙が提示したのに対して、鷗外が、ハルトマンの美学に拠つて、美の標準を高く、一つに絞つて批評活動がなされるべきであり、批評の基準の喪失を許容することはできない、といふ立場で対抗し、片やイギリス風、片やドイツ風というようにこの二大家が華々しく論議したものである。

その他文壇では、尾崎紅葉、幸田露伴、北村透谷、鷗外、などの代表作も揃ひ、雑誌では、すでにあつた『国民之友』（明治二十年二月創刊、民友社）『しがらみ草紙』（明治二十二年十月）などとともに、『早稲田文学』が明治二十四年十月に創刊され、早速、『しがらみ草紙』を相手にして没理想論戦を展開したのである。ことに『国民之友』は、最も影響力のある雑誌で、社会評論を主としてのせ、ちょうど『同志社文学』と同じくその記事は、政治、社会、思想に關する論説が中心であつたが、年一回の特別附録において文学作品をおさめ、遂にはそれが文壇の登龍門の觚を呈

するに至っていた。『同志社文学』が、その五十七号で、附録に、磯貝雲峯の、シルレル作「若武者」の翻譯をのせたのも、その響みにならつたものであろう。

社会的に時代をみると、明治二十二年の帝国憲法の発布につづいて、明治二十三年には教育勅語が渙発され、明治維新という大変な変革のはらんでいたいろいろの矛盾や可能性はめまぐるしく明治十年代に出つくし、日本が近代国家としてまがりなりにも、一つの方向に歩みはじめた頃がちやうど明治の二十年代であつた。明治のご維新ととみに生れた赤ん坊なら、二十才に、そしてさらに二十五才になつていた頃である。成人して気がついた社会がある、種の安定を得た社会で、それに反抗するにも、批判を加えるにも、彼等の先輩——直接動乱に処した先輩——が作りあげた堅牢な構造物がすでにできあがらんとしていた頃である。こういうご時勢におこつた、当時の日本の、そしてまた爾後の日本の象徴的なあらわれのような事件が明治二十四年一月におこつている。内村鑑三の不敬事件である。これは、そのまま、国家権力を背景とした教育勅語と、キリスト教との乖離に関する論争となつて発展し、『同志社文学』も積極的にこの論争に加わるのであるが、この件については後述したい。

2 『同志社文学』における文学

このように文壇では、すでに近代文学の名作がぞくぞくと生産され、近代文芸批評も『しがらみ草紙』や『早稲田文学』を拠点としてはなばなく展開されようとしていたこの時代の、明治二十五年という年における『同志社文学』、すくなくとも、その標題に文学をなめる地方の同人誌が、どのような活躍をしていたかを見てみたい。この頃、『同志社文学』は中央にも進出し、警醒社（湯浅半月の兄の創立にかかる出版社であり、『十二の石塚』もここから出版された）東京堂を通じて、東京でも発売されるようになり、（因みに定価五銭、附録のある時は五銭五厘）執筆陣も、同志社

英学校の書生、教授のみならず、中央の論客も寄稿するようになっていた。森田思軒、田口卯吉、山路愛山、三宅雪嶺などがそれである。内容はさきほどちよつと触れたように、思想、政治、社会、経済政策、自然科学、宗教というようにすこぶる多岐にわたっている。文学と称しているものの、それは決して文壇的文学という意味ではなく、ちよつと英語と、英語を媒介とする欧米の事情、科学についての知識および研究の総体を英学と称したように、邦語で綴る文化百般の主題を文学と称したもののようである。もちろん英学による教養もその範疇に入っていたのである。そして、そうした主題を論ずる際に綴る文章に価値を見出していたようである。この頃各地方でも、この種雑誌が多発された模様で、青年客気の筆のほとばしりは全国的な風潮であつたらしく、長崎に『瓊浦文学』、熊本英学校に『九州文学』、また熊本英学校から別れた東亜学院に『大江』などの雑誌の出版を見たらしいことが『同志社文学』の広告欄にみえる。五十七号の雑報欄に上記『九州文学』『大江』を紹介し、「編輯員には達筆家少なからずと聞く」として、負けてはならじ、とした意気ごみを見せているが、「達筆家」の存在を意識するところなどは、既述のように、百般を論ずる際の、綴る文章に価値をおいたらしいという推察を正当化しているようである。そして、この傾向は、おそらく、『同志社文学』だけのものではなく、中央の指導的な雑誌にもみられたものではないだろうか。『同志社文学』第一号にも発刊の目的を「智識交換、文章練磨」と詠っているのもこの間の消息を語るものである、といえよう。

しかし、記事を読んでもみると、『同志社文学』には、いまだに明治十年代的な残滓が、すくなくとも明治二十五年版についてはみられるように思えるのである。非常に記事が前述のように雑多、余りにも雑多であり、まさに、むしろ開化期の明治を彷彿させるものがある。もちろん『国民之友』や『しがらみ草紙』のようにプロフェッショナルな

雑誌ではなく、同志社、という一学園における書生の表現のはげ口のような出発をした雑誌であつてみれば、それは仕方のないことかもしれないが、やはりローカリティによる後進性はある程度いなめないのではないだろうか。

「対外策上の日本」(五十一号) 「写真術の沿革」(同) 「有神論」(同) 「完伝道者」(同) 「貧民救助策」(五十二号) 「日本現時の文学」(五十三号) 「銀貨下落」(五十四号) 「厭世的觀念」(同) 「歴史談」(同) 「男子の快事」(同) 「トマスカーライル」(五十七号) 「単一弦運動を論ず」(五十八号) 「今後の国勢と武士風」(同) 「天気予知法」(五十九号) 「医学と理学の關係」(六十号) 「近眼の話」(同) と、随意に選り出してみただけでもその多様さが分ろうというものである。数学、医学までとびだすのである。この年の翌年、巖谷漣をして、京の地の文壇的貧弱さを指摘せしめ、「吾が文学(狭義の)」の「指南者」としての『同志社文学』を切望せしめたのもかかる傾向のためであろう(六十二号)。五十号から毎号五十四号まで長睡子なる人士が「病牀の重夢」というエッセーを寄せている。雑録欄で扱われているが、病牀で自分をみつめ、淡々とした枯淡の味わいのある文章である。幼時を懐古し、己が勉学の跡を辿り、私事を語り、なかなか読ませるが、五十一号の分を読んでも、当時の青年の新しい学問への驚きと憧憬と熱情がよく読みとれ、『同志社文学』という雑誌の性格を側面から物語るかのようである。紹介を兼ねて、『同志社文学』の一般的傾向を論じてみたい。

「祖父も父も漢学専修予は其中に生れたれば孔孟を神の如く敬愛し程朱を祖先の如く追慕し」ていたほどであるので、「生来の素志は固より漢学なりしが……英学校に入りしは意外の境遇にして恰も一小室より広園に出たる心地」がした、と長睡子は語るのである。ここに明治の洋学者の特色が語られているようである。彼等の大半は武士階級の出身であり、儒教的な教養そのままに洋学をうけとめたようである。文章は経国の大業である、不朽の盛事であると

てもつぱら治國平天下を論ずるのであつて、そういう儒教の内包する功利主義がいまおい士君子をして実利実益的な物質文明や生活様式、もしくは精神の修養というある意味での実益へ関心を向かわしめたといえるであろう。文学はそうした天下國家を論ずるべきものであつて、西洋の文学的感覚とおおよそ縁の遠いものであつた。もちろん、これは、開化期に支配的な考え方であつたが、割合と長く生命を保つた考え方でもあつたのである。ただ『同志社文学』が、同時代の『早稲田文学』などとちがつてほとんど文学、すなわち山路愛山などのいう狭義の文学には関心を示さず、その方面の翻譯や小説に頁を割愛することが少なかつたのは、そうした古さが多分に残つていたためであつたらう。それに、武士階級に訴えたピュリタンのな道德的潔癖さが、稗史小説類を蔑視せしめたとも考えられる。(もつとも新体詩のところみは、明治二十五、六年頃から序々になされるが、これについては、岡本胤夫、『同志社文学』と新体詩、『人文科学』—比較文学研究—第一巻、第一号〔昭和四十一年十月〕、同志社大学人文科学研究所 にくわしいからここでは論じないことにする。)たとえば、六十号の巻頭言「如何にして冬期休業を費す可き乎」に編集主任石塚正治が、「一室に立て籠り、「脚爐たもとを擁して、栩栩、夢想に耽り、雑誌に耽り、小説に耽け」るときは「豈に青年男子の為すべきことならんや」と戒めているのをもみても、また五十四号の巻頭言、「同志社文学に題す」において、小崎弘道が、「其思想、其真理人生の至情に適恰する」ところあるべし、と説き、文学は「苟くも世を動かす」ものでなければならぬ、「文詞章句の小技」を弄することあるべからず、として、「我同志社は精神的の教育を以て世に称せらる。其文学亦精神的ならざるべからず」と言つているところにも明らかである。小説、戯作のような文学は、いわば「社会的低次の文学」(中村光夫、『明治文学史』筑磨書房、昭和三十九年、九六頁)であり、東大を卒業してまでもこの世界に身を躍らせ、政治小説を否定し文学の功利性を否定した逍遙の『小説神髓』の世界は、『同志社文学』にとつては、時代的

に同時代でありながら、地理的に同時代たり得なかった、と考えずばなるまい。『同志社文学』には、だから、小説はない。創作といえば、わずかに漢詩、和歌（桂園風）があるのみで、これは明らかに武士の青年子女のたしなみであつたものである。

『同志社文学』の記事に写真術や、医学や、数学に関する紹介論文があるということ自体、小崎のいうように精神的なものを目指す一方、方今書生の功利的な洋学への関心をも物語っている。長睡子の学問修業にもそういうところがある。

彼はまず、医学を学ぶ。標本の人体骸骨に驚く。臓腑の組立模型標本にもたまげる。それに「髯は関羽の如く碧眼閻魔の如き」外人が「梵鏡の如き音声にて」英語を教えているのにも一驚する。いろいろの実験、手術をみて、「漢方医の迂濶を悟る。」地理学を学んで、世界地図に認識を新にする。天文学、物理学、化学、歴史学も修めらる。海外遊学の志をもつ。病に倒れる。一日も早く海外に遊び、「英学を為さんとの熱望」もために中道に棄てなければならぬ。つくづく考えるに、「牛肉を食ふを以て文明とし酒色に耽るを以て開化とする……洋学生風」などはまことに国賊と呼んでよいだろう。だから道義の学においては「儒道に優る者なし」と長睡子は思う。「されど知識を拓むるには必英学を為さざるべからず」という結論に達せざるを得ない。「天下の形勢を觀察し時世の変通を識者にして誰か英学を為さざらん」などと、病中、友が皆出はらつたあと、ただ独り想を走せるのである。この長睡子の感慨は、明治開化期の書生に共通のものである。同志社に学びながら、道義の点では儒教、知識の点では英学、などと考えるところ、極めて非同志社的で、小崎弘道などならば柳眉をさかだてるかもしれない。しかし、『同志社文学』には、こうした功利主義が、キリスト教的精神主義と奇妙に同居している。長睡子流の主義がやはり『同志社文

学』の一つの色彩となつてゐることはいなめない。意外と、法、経、理関係の論説が多いのも、そういう一面を物語つてゐるのではないだろうか。すでに紹介済みのもので以外にも「数学者ルーミス」(五十一号)「関西の事業」(五十六号)「人物の販路」(五十八号)「京都産の食蟲植物」(同)「宮津港開港に就て」(六十号)「窒素及其化合物」(同)などというのが散見される。

このような実益主義に支えられた論説が『同志社文学』の一つの柱であるとすれば、もうひとつの柱は、なんといつても精神の支えであるキリスト教に関する論説である。私は、これが一番『同志社文学』の特色ではないかと考へる。これについて紹介する前に、『同志社文学』の羊頭狗肉である狭義の文学についての論説なり作品なりについて簡単にみておきたい。ただ新体詩もしくは西歐詩の翻譯についてはすでに岡本昌夫「同志社文学」と新体詩」に、わしいから触れないことにする。

創作といつても雑録の中に文藻欄のようなかたちで投稿された和歌、漢詩類である。和歌といつても池袋清風の評点になる桂園風の花鳥風月を詠う形式化した表現の綾に巧拙を競う和歌であり、士族たるものの教養程度のものであつた。

照る月に沖行く舟の数見えて

夕風寒し須磨の浦なみ

といったたぐいのもので、作者が誰であろうと、個性的な味などあるべくもないものであつた。漢詩もまた然りで、偶感や紀行、季節に寄するものなど通り一遍のものである。すでに明治も二十五年になれば漢学の衰退は、はつきりしており、細かい感情の綾、主義主張などはとうてい固定化した表現の組み合わせの技巧の發揮にしかすぎなかつた漢

詩の及ばぬところであり、漢詩のごときは、士族出身者の未練たらしい、おろかしきアナクロニズムとしかうつらなかつたのではないだろうか。しかし、寄稿者は大真面目でこれを作詩し、また編集子もこれを毎号のせている。どの詩を読んでみても、その意を移すのに固定化した美辞麗句を連ねる、というやり方である。編者は、一方では、過去の遺物である漢文、漢詩をのせ、一方では漢文、漢詩が、もはや日本文化をはばむ以外のなものでもないというような論説を堂々とのせているのである。すくなくとも狭義の文学に関しては、『同志社文学』には、一つの主張といったものはないのではないだろうか。小崎弘道の説く「精神的」な文学が、儒学風の教養の名ごり惜しげな誇示にとどまつている有様である。こういう中であつて、思軒森田文蔵の寄せた「日本現時の文学」なる講演原稿は、この漢詩にとつても一つの痛棒であるし、また『同志社文学』のみならず、いまだに、日本の文学的風土のもつていた古いなごりをするべく剔抉するものである。

森田思軒の「日本現時の文学」

森田思軒は、当時すでにヨーロッパの文明を直接体得した翻訳家、批評家として活躍し、『国民之友』の客員ともなり、『報知新聞』の主筆として筆名は高かつた人物である。(まだ有名な翻訳『十五少年漂流記』は出していなかった) 明治二十五年現在には、その前年矢野龍溪とともに報知新聞社を退いていた頃で、新潮社の『増補改訂日本文学大辞典』の記事によれば、思軒は報知新聞退社後「間もなく、新聞『国会』から招聘され、又京都の同志社からも礼を厚くして招かれたが、当時彼には東京を去り難い事情があつたので、遂に『国会』に入った」とある。とすれば、この頃、すなわち思軒が同志社で講演をした明治二十五年三月七日、八日、あるいは講演原稿の活字として発表された同年四月二十日頃は、同志社からさかんに勧誘のあつた頃であつたと推定してもよろしいし、思軒自身も、身辺の事情

はともかくとして、同志社には積極的な好意をもっていた頃だと考えてもよいであろう。もし思軒が同志社に入社しておれば、『同志社文学』の方向も大いに変わっていたであろうことと思われる。磯貝雲峯、森田思軒の二枚看板はたいしたもののである。五十三号の論説欄のトップは「日本現時の文学」森田文蔵君（当時三十二才）である。

現今日本文学は盛んである、と説く人もあれば、衰微であると説く人もある。しかし、現今は盛衰を論ずる時期ではなく、むしろ変化の途上である、といった方がよろしい、と思軒は説きおこすのである。その原因は、古き固定化した言葉が完全に一掃されていないからだと考える。ちょうど西洋中世が、ラテン語を用いることにより、話し言葉と、書き言葉が峻別され、そのため学問や言葉に階級性が生じたように、現時日本も漢学の残滓が一般的な無智を呼んでいる、と考えるのである。そして思軒は漢学が新しい思想を盛るには不適であると綿密に分析してゆく。まず漢学は「其の意を遺れて其辞に趨れる病」をもっているという。「着眼の独創なること及び見識の深邃なることよりも寧ろ造句の精奇なること行文の宛転玲瓏なること」に努める弊があると断ずる。思軒はこれを逐一諸作を検してみてもその結論に達している。「必ず同一の或る文章が少しづつ、其姿を易へては各家の文章に出現しをる」のである。たとえば、詩文にすこし巧みな人が世に容れられず貧乏して死んだ、というようなことがあれば、必ずこれに寄せる詩は異口同音に、「生前に富貴なりしとて何の益あらむや寧ろ身後百年に伝はるべき詩卷の留まりをるこそ誉れなれ本懐なれ」と慰める。医者墓銘には必ず「丈夫世に生るる大臣となりて国の疾苦を療治するか医者となりて人の疾苦を療治するか」と詠う。そしてこの人士が医者となつたのは国の大臣となつたのと何等遜色なし、とするのである。このようにお定りの表現法に走り、真意、真情がおろそかになる、というのである。漢学の欠点の第二として、小道理をもつて大道理と錯覚する弊があげられる。漢学者の文章の大半は、「昔ばなし」(fable)もしくは「寓言」(allegory)

に託してものの道理を説こうとする。これらは「一時一項の釈義とすべきのみ」で「以て全体の意を悉くす可きものにはあらざるものである。換言すれば小道理しか伝えないものである。これらが小道理なることを認めつつ帰納的に太道理に到達するのは大いに結構だが、小道理を大道理と錯認するのは困るのである。

思軒はさらに、現今の知識欠乏をすべくつく。しかもそれに社会的分析を加える。有望な洋学者が輩出する気配はあつても「社会が渠等を賞玩するに急にして彼等をして其の学問を大成するに暇あらざらしめ」る情勢であるといふ。学問の重みには限度がないことを知るべしである。こうした学者の無知の原因については昭和の今日の同志社、いや日本の学会においても内心忸怩たらざるを得ないものがあるのではないだろうか。

最後に思軒は、人が皆政治、事業に走り、高名、立身出世を望む風潮であるが、「功名事業二者の性命は現在なり学問の性命は永久なり」という立場から学問のすすめをするのである。福沢的な実利実益をふまえた学問のすすめではなく、即決的な利益を越え、慧知による展望に支えられた日本文化の志向方向への洞察がここに見られる。

この稿は未完となつており、遂に続編は印刷されなかつたが、この未完稿だけでも堂々の大文字であり、思軒の西欧文化的教養に支えられ、さらに細かい分析をふまえた文芸時評の真髓がよくうかがわれる。これを未完のままにして続編を印刷することのなかつた当時の編集者の見識を疑わねばなるまい。この論説は、『同志社文学』という雑誌のもつてある一部の性質に対してひそかなアイロニーを呈するものであり、その意味で極めて面白いと思つたので、ここに紹介した。ただ当時の編集子も、これをアイロニーとうけとめたかどうかは疑わしいであろう。思軒居士の同志社招聘のならなかつたのを遺憾とするものである。

2 『同志社文学』とキリスト教

さて、最後に、『同志社文学』の重要な柱である宗教的色彩について、一つの画期的な事件をめぐる論争をとりあげて、瞥見してみたい。そのまえに宗教色のある論説にどんなものがあるか、列挙してみよう。

「新島襄先生に就て」宮川経輝（五十一号）

「有神論」平瀬龍吉（同右）

「完伝道者」山室軍兵（同右）

「同志社の基礎」デビス（五十三号）

「宗教の暗黒面」蓼洲漁史（同右）

「宗教的教養の二大要素」大藤重賢（五十四号）

「宗教哲学」ラッド（五十六号）

「同志社学生諸君に望む」片岡健吉（五十九号）

「基督時代に於ける猶太人の宗教思想」アルブレクト（五十九、六十号）

等である。この他に、巻頭論文で無署名ではあるが、重久篤太郎氏によって柏木義円に帰されている「勅語と基督教」（井上博士の意見を評す）というのが、六十号（明治二十五年十二月二十日）にある。（重久篤太郎、「同志社文学と西洋文学」、『主流』第二十号〔昭和三十二年五月〕、同志社英文学会。なお、重久氏自身のお話によれば、この考証は関鼻作『井上博士と基督教』（明治二十六年五月）によった、という。）（なお、一号まえの五十九号にも同題の巻頭言があるが、論旨、内容、主張すべてで六十号のそれにおとる。果して誰の筆であろうか。）従前の巻頭論文のように簡単なものではなく、長篇で、論旨

もきめが細かい。これから紹介しようとするのはこの柏木に帰されている巻頭論文についてである。これは井上哲次郎博士を駁する一文として草されている。(柏木義円は、『同志社文学』六十四号にも「再び井上哲次郎に質す」なる一文を寄せている。) それでは井上哲次郎の論文とは何か。これは明治二十五年十一月、『教育時論』誌上で、「教育勅語對基督教の問題について」として発表された論文のことである。明治二十三年十月、教育勅語が渙発されたが、これは明治政府が、維新以来の社会の動搖を安定させるために、家父長的な儒教倫理を再編成し、人倫の道の權威を再建しようとした試みであつて、ために天皇の尊嚴性、神聖化、忠孝の国民道德化、ひいては明治の天皇制の確立強化に大きな役割を果たしたものであるが、折から明治二十四年一月九日、第一高等中学校の勅語奉戴式で内村鑑三が天皇の親署のある教育勅語に対して拝礼をしなかつたという事件が起つた。かくて俄然国家主義者の側からキリスト教排撃運動が起つたのである。井上の一文はそのもつとも代表的なもので、次のような要旨のものであつた。

教育勅語は一家の中に行うべき孝悌の道に始まり、忠君愛国をもつて最高の徳としている。それは全く国家主義に基づいた世間門の道德であるが、耶蘇教は純然たる出世間の道德を説き、さらに国家意識がなく、無差別の愛を説き、忠孝の二徳を説かない。よつて耶蘇教は本邦人と相容れない。というのであつた。

そもそも日本の思想界で、明治二十年代は、十年代の欧化主義、疾風怒濤時代の反動期として、国家主義、安定の時代である。外教、すなわちキリスト教に対するこの論争は、宗教方面にあらわれた国家主義思想の一面であり、井上がひとたび論争の口火を切るや、仏教、神道の人々もすんでこれを助け、キリスト教の論客もまたこれを受けてたち、明治の思想界におけるもつとも記憶されるべき論戦であつた。結局完全にキリスト教派を屈伏させることはできなかつたが、日清戦争までつづく国民的自覚に影響したことは事実である。また、他方キリスト教側が、この論戦

のプロセスにおいて、天皇制との妥協への道を歩みはじめたことも事実である。その原因のひとつは、日本のキリスト教界内に存在した国民主義である。日本の教会を外国のミッションから独立させ、日本風のキリスト教を樹立せんとしたところに国家主義、日本主義との結合が一部見られたということである。しかし、当初においては、植村正久などは、その拠つてた『福音週報』五十号において、新教キリスト教徒は、キリストの肖像にすら礼拝しない。聖書にすら跪拝しない。どうして今上天皇の勅語にのみ拝礼し得ようか。今日、小中学生に対して強制されているご真影拝礼のごときは尻戯である、と論じ、さらに五十一号では同志連署で、どうしても勅語に拝礼せよとならば、「死を以て之に抗せざるを得ない」とまでいきこんでいる。(参照、隅谷三喜男、「天皇制の確立過程とキリスト教」、『民権論からナシヨナリズムへ』、明治史料研究連絡会編〔明治史料研究叢書四〕〔東京、お茶の水書房、昭和四十年〕)

この論争に対する『同志社文学』の一番早い反応の一つが、前述の柏木義円の「勅語と基督教」である。前記井上論文が談話筆記のかたちで『教育時論』二百七十二号にでたのが、明治二十五年十一月、これに対して、柏木論文が『同志社文学』六〇号で同年十二月二十日、本多庸一の「井上氏の談話を読む」が『教育時論』(二百七十六号)の同年十二月十五日号、横井時雄の「徳育に関する時論と基督教」が『六合雜誌』(百四十四号)の同年十二月十五日号というふうに、響をならべてキリスト教側から反井上説がでていた。さらに柏木は『同志社文学』六十四号(明治二十六年四月)に「再び井上哲次郎に質す」を発表している。誰がこの反井上説の口火を切ったか、ということ断定するのは困難なことである。日付の面では、本多、横井が柏木より五日早いけれども、原稿提出、植字、印刷、校正などの手順を考えると、雑誌の発行日だけで先陣をきめるわけにはいかない。ただ柏木も、この有名な論争の最も早いチャンピオンの一人であつたということは言えるであらう。

柏木義田の「勅語と基督教」

柏木は、四項目にわけて井上説を反論する。基督教と国家、基督教と現世、基督教と博愛、基督教と孝行の四項であるが、第一の基督教と国家に関する主張が全篇の論旨の根幹となっている。彼はまず、はっきり宗教と道徳との間に一線をひく。

天皇陛下は国家の元首なり故に其国民に国民的の道徳を訓示し玉ひしなり基督は世界の人類の為に人間の大道を立て玉ふなり故に専ら人の心に敬神愛人の誠意を打立てんと為し玉ひしなり陛下若し基督の説き玉ひし如き詔勅を發し玉はば是れ越権なり非立憲的行為なり……陛下詔勅の神に対し人類に対しての義務を説かず基督の国家を説かざる共に当然の事にして而して決して相戻らざるなり……。

そもそも、国家主義とは何ぞや、国民が当然の義務をつくし、緩急困難に殉ずることである。それならばキリスト教は決して国家主義にもとるはずがない。しかるに国家主義を国民を国家の奴隸、器械となすことであるならばキリスト教は国家主義とは明らかに相いれない。勅語もそういうことを望んでいない。陛下は一国の元首であつて、一宗教界の元首ではない。だからこそどんな宗教を奉ずる者にも共通な実践道徳を示されたのである。勅語は決して学問や、宗教の領域に踏みこんでいない。そしてそれはそれでもことに立派である、と宗教と国民道徳との次元の相違をはつきりわけるところは、プロテスタントの教義を奉ずるものとしては当然の所論であり、この時代に、これだけの論旨が展開できたのは立派である。次にキリスト教と現世についてであるが、これは井上の、キリスト教は現世を軽んずるから勅語の趣旨にあわない、とする説に対する反論であるが、元来井上のこの説は、キリスト教どころか宗

教の本質に全く理解を欠いた発言であるから、聖書の引用による実証によつて簡単に論駁している。第三のキリスト教と博愛についても、井上説はとるに足らず、キリスト教の愛は無差別の愛であり、勅語の愛は差別的である、キリスト教は自分の親を敬わずに他人の親を敬うように教えている、というのであるが、柏木自身も、キリスト教の愛が、自分の親を愛せずに他人の親を愛することである、ときいて「未だ」そのような「謂たるを知らざるなり」とあきれている。かかる説は、行為の末端を論ずるものであつて、愛そのものを知らない発言であるとする。こういう次第であるからキリスト教と孝行の問題についても井上説は論ずるに足らないものである。要するに、第一のキリスト教と国家についての柏木の正論が、以下の論旨すべてを支えている。勅語は日本国民教育の徳義を奨励するために發布されたものであるから、憲法の下に自由を得た宗教ならばそのなんであるかを問はず、勅語の趣旨に抵触するはずがない。もしそういうことがあるならば、「我立憲帝王の聖詔を誣るて非立憲的たらしむるなり」と結断する。極めて時代的にみて進歩的で勇氣のある、しかも正しい発言である。オーソドックスである。勅語が、仏教的でも、神道的でも、儒教的でも、ましてやキリスト教的であつてもいけない、違つた範疇に属するものであること、すなわち、立憲君主国の趣旨にのつとつた発布物であることを明らかにしたものであり、近代政治と宗教との関係をはつきりと洞察している。ただ明治政府の眞のねらいである儒教的道徳復活の意図には触れず、儒教とてもキリスト教と同様の利害をこの問題に關してもつていないかの言辞を弄したのは、あまりにも真正直な立論であつたから、かえつて反論される方が擦つたいぐらいの感があつたらう。

柏木は、やがて石塚の後任たる磯貝雲峯の後を襲つて『同志社文学』の編集主任にあたり(明治二十六年七月)、たとえば高安月郊訳に帰せられると思われる、ドストエフスキーの「損害と侮辱」の翻訳なども、文藻欄の末に六号活字

で小さく組んだりするほどで、同時代の小説はもちろん近代ヨーロッパ文学にも積極的には理解を示さない人物で、雲峯の同志社を去った後は、ますます『同志社文学』においていわゆる狭義の文学の香りがなくなってしまったということであるが（参照、重久篤太郎、「同志社と英文学」昭和四十年度同志社英文学会年次大会特別講演（昭和四十年十一月三日）、ことキリスト教となると、たしかに一家言をもった一流の人士であることが分る。と同時に『同志社文学』のもっているカラーが、同志社を支える精神的支柱であった柏木などのような、この方面での人物のカラーに染まりがちであったことも否定できない。同志社がいわゆる文壇的文人を世に送ることがすくなかった理由の一端も、かかるところにみられるであろう。『同志社文学』はむしろ『同志社評論』とでもいってよいような雑誌であった。

（斎藤 勇）

第六十一号—第七十号

ロシア文学に関係あるものとして、六十三号に、高安三郎のドストエフスキーに関する一文があり、また、六十五、六十六、六十七の各号に、秋風吟客訳のドストエフスキーの小説『損害と侮辱と』の一部がのせられている。

『損害と侮辱と』は、現在の邦訳名をもってすれば、『虐げられし人々』のことであるが、この原題は、『虐げられ辱かしめられた人々』である。

なお、この訳は秋風吟客訳となっているが、訳者は多分、前記の高安三郎と思われる。（六十三号『ドストエフスキー』

の一文中に「彼の傑作損害と侮辱を読むものは……という言葉がある。」

高安三郎は大阪の人で、明治二年（一八六九年）生れ。月郊と号し、詩人、劇作家。詩集『夜濤集』『春雪集』また『東西文学比較評論』『日本文芸復興史』などの著作や、戯曲などがあり、昭和十九年（一九四四年）歿。

高安三郎と同志社との関係については、つまびらかにしないが、六十一号時評欄に次のような記事が見える。

——故総長の遺徳

同志社女学校新島文庫を新設して未だ公に金品を募らず。忽ち一輪天外より落ち来りて、「故新島先生の高風を追慕し」と語り、英書三十部を寄送す。寄送する者は誰ぞ、大阪の高安三郎氏、而して其名は校長も知らず、社員も知らず、教師も知らず。

以上の文から見れば、高安三郎と同志社との関係はこの時から生じたかのように思われる。

『ドストエフスキー』六十三号、「雑録のうち、「青燈の下」に」

全部で三ページに満たぬこの短文は「ドストイエフスキイ名はフェドル、ミカイロウキツチ千八百二十一年露西亜モスコウ府の貧しき非職軍医の家に生れぬ」という書出しで初まるのであるが、固有名詞の書き方から、英文のテキストによるものであることがわかる。

ドストエフスキーが出世作『貧しき人々』（本文では『衰れる民』）をもって文壇に登場した時のエピソードは、今ではだいぶん有名になり、ほとんどの解説や、紹介に記されているものであるが、この本文にも要領よくまとめられている。すなわち、友人のグリゴロヴィチと詩人のネクラソフがその原稿を夜を徹して読み、興奮と歓喜のあま

り、朝の四時に作者の家を訪れ、「新しいゴーゴリ」の誕生を祝い、さらにペリンスキーを紹介したところ、彼もまた大いに感動し、高く評価したというエピソードである。これは事実で、ドストエフスキー自身がのちに、一八七七年の『作家の日記』二月号第二章の三に、「古い思い出」として詳細に記しているところのものである。

ドストエフスキーがペトラシェフスキーのサークルに加わったために逮捕され、一旦銃殺の刑を宣告され、刑場において特赦された（実はこれはお芝居なのであるが）ことも述べられている。ここで「ペトラチエフスキーの叛乱起れり」とあるのは、間違いである。ただ、このサークルがフリーエの空想的社会主義を信奉し、その実現を企図していたとするならば、広い意味において「叛乱」ととらえることもできないことはないが、「叛乱起れり」とある以上、それはやはり、一定の暴力的行動をさすものとしか理解できない。従つて、これはやはりなにかの誤解であろう。

ドストエフスキーの作品における人物については、高安三郎は次のように述べる。

「その作の多くはドラマなり。人と外界の衝突を写して惨憺たる運命を示す。而して其材となるものは常に貧民なり、愁人なり、侮辱せらるゝものなり、傷害せらるゝものなり、压抑せらるゝものなり、泣て言ふ能はざるもののに言ひ、苦て訴ふる能はざるもののに言ふ。」

ここに言うドラマとは、もとより戯曲の意味ではなからう。ここでは主に、『貧しき人々』や、『虐げられし人々』や『罪と罰』などの登場人物が簡潔に特徴づけられ、ドストエフスキーの人民へのヒューマニスティックな態度を見ている。続いて高安三郎は、ドストエフスキーの技法について、「然れどもユゴリの如く自己の意見を現わさず。而して復たゾラの如く人間の醜態のみを描かず」と規定し、ロマン主義でも自然主義でもないことを指摘する。

「社会の陥穽に落ちて、肉体は汚るも、精神は尚清きもの、気象高きもの、彼の主人公に少なからず。彼は暗所と

共に明所を見る」

この言葉は、とくに『罪と罰』のソーニャについてあてはまるのであるが、筆者は、キリスト教的愛と忍従の思想についてはふれていない。つづけて、「唯々生存の競争激烈にして道理未だ定らず、過去の压抑現在の制限、左右より迫り来る」として、当時のロシア社会の現実のきびしさが、「ラスコルニコフならぬものも懊惱し煩悶し苦慮し呻吟し、果ては狂して罪人となし」てしまうと、小説の社会性を強調している。

本文においては、前記の『哀れなる民』——『貧しき人々』、『罪と罰』の他に、作品名としてあがっているのは、『損害と侮辱』——『虐げられし人々』、『悪魔』——『悪霊』、『悪人』——『白痴』であり、晩年の作品『カラマーゾフの兄弟』や『未成年』については述べられていない。

したがって、のちに『カラマーゾフの兄弟』に集約されている思想上、宗教上の諸問題にはふれられていない。

しかし、このことは、当時ようやく、『罪と罰』が内田不知庵の訳により出版されたばかりであるということを考えれば、別に不自然でもあるまい。これは日本におけるドストエフスキの、単行本としての最初の翻訳出版であった。だから、高安三郎が執筆したこの『ドストエフスキー』と、秋風吟客のペンネームにより、六十五〜六十七号に翻訳掲載した『損害と侮辱』とは、内田魯庵訳の『罪と罰』とともに、日本におけるドストエフスキの最初の紹介として、大きな意義をもつものであろう。

『損害と侮辱』 秋風吟客訳

第一章—六十五号、六十六号

第二章、第三章—六十七号

『損害と侮辱と』——『虐げられし人々』は全四篇とエピローグから成る小説である。

『同志社文学』に掲載されたのは、ごくその一部、すなわち第一篇の初めの三章にすぎない。そして六十七号にて、掲載が中断されたことの理由については、つまびらかにしない。

この翻訳は、もとより、英語からの重訳であろうから、そのままロシア語の原文と比較することはできない。ロシア語と英語との構文、文法などの違いから、この翻訳文は、ロシア語からの直接訳文（たとえば、米川正夫訳のもの）と比べれば、全体として縮まっており、かつ、ニュアンスの差はおおむねなくもないが、その意は充分くみつくされている。例としてその一部をあげよう。

秋風吟客訳 第一章の冒頭

去年三月廿二日の晩、私は実に奇妙な事に出逢った。私は下宿を探しに一日駆け廻って居た、今までの所は湿気があつて風を引いたから去年の秋から換えようと思つて居たが、つい今まで——春まで延ばして置た。

米川正夫訳 同じく、第一章の冒頭

去年、三月二十二日の夕方、私は世にも奇妙な事件にぶつかった。その日一日、私は街を歩き廻って貸家を捜していた。今までの住居はひどく湿けて、それに私はその自分「時分、であろう」もうたちの悪い咳をし始めていたのである。また秋の頃から引越しを考えていながら、春まで延び延びになってしまったのだ。

なお、高安三郎は、他にも、六十四号においては、やはり雑録「青燈の下」に、『梅倫と蘆騷』なるかんたんな人物比較論をのせ、六十三、六十四、六十六号においては、イブセンの『社会の敵』の一部を翻譯掲載していることをつけ加えておく。このイブセンの紹介も、恐らくは、日本における最初のものであろう。

さらにつけ加えるならば、高安三郎がドストエフスキーの影響をうけたと思われる『犠牲』という小説を書き、出版されたことがわかっている。それは、六十三号の批評欄において、雲峯が、その書評を行っていることである。この『犠牲』なる小説の芸術的あるいは文学史的価値については不明であるが、雲峯は「罪と罰」に類する妙趣の心理小説」と評している。

(清水邦生)

第七十一号—第八十七号

『同志社文学』第七十一号以後は日清戦争直前から戦争中に亘って出版されたものであり、従って戦時色濃厚といつてよい。社説や論説欄にそれが明瞭であるばかりでなく「文藻」や「雑録」などの欄にもそれがうかがわれるのである。

第七十九号（明治二十七年八月）の社説は『戦争と平和』と題され、当時の同志社人の戦争に対する態度を示している。これによれば、世界統一、万国平和の達成は人類の理想であるが、その統一は兵力や政治の統一であつてはならず、基督教の布教による精神的統一でなければならぬ。そして基督教の布教事業は一日も止むべきではなく、海

外伝道もまた極めて必要である。そしてこの精神上の統一や基督教の布教のため一時の戦争は止むを得ぬものと説くのである。この論旨は第八十号の社説にも現われ、そこでは、「東洋の文明進むに非れば東洋の平和決して来らざるなり」といい、「基督教国の義人が善く東洋の実勢を諳し、正義人情の東洋に伸びんが為め、満腔の同情を寄せ、其公正なる大論を響かせ来るは大に東洋に道を弘む所以なり」と、外国の宣教師の理解を要請している。『同志社文学』第八十四号は明治二十八年一月発行であるが、その巻頭の社説は戦時中の国民や学生の覚悟を説くものである。そこでは、「今や世を挙げて征清に熱中し、戦勝に酔へり」といい、「この時に際し、静かに学び、深く警め、その精神を鍛ひ、其品格を養ひ、以て国家百年の長計をなすは是れ我党の大本願に非ずや」と警告し、「無思慮なる世人が眼前の出来事の爲めに其眼と其耳とを奪はれ、自家の位置と本領とを忘却するに際し、静かに警鐘を打ちて彼等を警醒」しようとしている。要するに同志社人は、戦時下といえども、教育と宗教の重要なを自覚し、国家の大成と真の万国の平和を達成することに努むべきであると説くのである。

第八十四号の論説「戦勝後の教育」（森口喜之助）は、以上の主旨をふくみつつ、更に具体的な教育法を論じているが、それによれば、現時の教育において重視すべきものは、一つは兵商の教育、も一つは世界的教育であるとする。兵商の教育は戦時下必然の要請に出でるものといつてよいが、殊に海事教育を重視していることが注意される。又世界的教育とは、日本人がいわゆる島国的偏窟根性を捨てて、世界的観念に富む国民たることの必要を説くものである。第八十六号の社説「世界大の胸宇」も同じ論旨に立つて世界人たることの必要を説くものである。

戦時下においては、道德の肅清を期する論文の現われるのは当然であるが、『同志社文学』においてもそれははっきり現われている。第七十二号の社説「道德問題未だ解決せられず」や「使徒保羅を論じて当今の時弊に及ぶ」は、

何れも道德問題を論じたものである。第七十四号及び第七十五号は何れも社説において、「社会風紀の振肅」を論じ、本願寺法主の不徳を難じている。

第八十五号の社説「道德的直覚」と論文「第四回博覧会と矯風軍」は何れもわが国の道德感覺の低調を慨嘆し、殊に蓄妾の風習と売淫を論じ、その矯風を叫んでおる。第八十七号においても同じく社説において海外における日本職業婦の問題や国内における醜業婦の問題を統計を示しつつ論じている。

文学的に見て価値ある論文を求めるならば、坪内逍遙の「評論と創作」(第七十二、三号)及び「東都現時の文学界」(第七十九号)、鎌田亥四郎の「ショーペンハウエルの厭世観を批評す」(第七十九号)、福地源一郎の「日本の文章」(第八十一号)、坂田貞之助の「英雄崇拜と宗教」(第七十一号)などを挙げる事が出来る。

坪内逍遙の文章は何れも講演筆記であるが、なかなかの力作であり、興味深く読まれる。しかもこの両者はいずれも滝田貞治の『逍遙書誌』(東京、米山堂、昭和十二年)にも、『逍遙選集』(東京、春陽堂、大正十五年―昭和二年)にももれているのであつて、この意味でも極めて注目すべきものである。

「評論と創作」において逍遙は先ず評論と創作の相違について述べているが、評論を更に評と論に分ち、評とは「作の醜美是非善悪などを判定する働き」を意味し、論とは「真・善・美とは何かを研究する学問」であるとする。前者は批評であり、後者は哲学ないし科学であるが、この両者を合したものが評論であるとする。次に批評は創作家を裨益するか否かの問題を提起し、これにはイエスとノーの両方の答があり得るといい、先ずノーの方の所論としては、

「人丸や赤人がどんな定見を以て居たか唯々自然に感じたことが歌となつて頭はれたので理窟で出来たものではな

い。ホームルやシェークスピアも精確な定見を持つては居なかつたらしい。或は持つて居たという説もあります。が、到底哲学者のやうに判然とした考を持つては居なかつた様であります。」と述べ、更に結論として、

「私は近松は哲学上の意見とか人生に対する観念とか云ものを判然と持つてゐて書いたとは思はない。詩人の本領とする学問は哲学などを研究する書物でなく、詩人の学問といふものは人間とか自然とかいふ此大きなホン、即ち此の天地という活きたホンを読むのである。書物に就て理屈を探索するは詩人のなす事ではない。」

と述べている。

次にイエスの方の議論に入つて(第七十三号)いるが、ここでは、作品が生れるには、因と縁とが必要である。因と天才そのものである。詩人の能力である。縁とは、天才の能力を発揮せしめる境遇や教育であるとする。そして評論はその外的な境遇を形造るとし、バイロンとギョーテを例に挙げ、「バイロンは死ぬまで、三十まで同じ思想でつづき、ギョーテは廿五、六以後漸々變つて参りました。ギョーテのセルフ・カルチャー(自修)とバイロンのカルチャーは違つて居たので御座ります」と述べる。

この両方の説の何れが正しいかの議論に入つて逍遙は、昔の作家の心と今の作家の心は違つていい、昔の作家は自意識を持たず、「半無意識」に書いたという。ホームルのイリアッドなどの叙事詩には作家の意見などはなく、たゞ哀れだとか、勇ましいとか、無残だとか位のことを挿入するだけに過ぎない。日本の近松の浄瑠璃などもそういう叙事詩であつて、客観的であるという。然るに近世に近づいて来ると、大抵の作品の上に作者の観念や理想がはつきりと現われて来る。個人主義の影響で人が自己を重んずるようになり、作家相互間の相違が著しくなつて、ブラ

ウニングとテニス、バイロンとウルツヨルスなど何れも大いに違つて来ていると説く。

次にこのことは批評においてもいえるといつて批評の発達を述べ、オーガスタン時代のアリストテレス万能の批評から、アデソン時代に至つて次第に規則に拘泥しない批評に至り、次いでジョンソンは自然に叶うことを以て至上としたが、更に審美批評から帰納的批評に至つたとし、現代のイギリスの批評家で面白いのは、エドワード・ドーデンとモールトンであり、それらを解釈的科学的批評であるといひ、かような批評の効用については、「因より大創作を呼起す程の効能は御座いますまいけれども、多少自然や人間を感得するの媒にはなりません。人間といふものを解剖して研究する時の助けになる丈の効能はあります」と述べるが、「到底批評は創作の因ではない。タカダカ縁になるのみであります」と述べる。

次に逍遙は評論の論のことに入るが、この方は時間の關係からか、非常に簡單になつてゐる。ここではただ、今日詩人文人も多少は哲学を研究する必要があるといひ、十九世紀にあつては（當時はまだ十九世紀）理窟の世の中で、右からも左からも色んな理窟が襲つて来る。それを聞かぬふりをするわけにはゆかない、それに化せられぬだけの研究しておかねばならぬという。今日は我をなくし、理想をなくするわけには行かない。いな大いに自意識と理窟を大にした方がよい。「昔の詩人は半無意識で心が清かつたが、今の人は理窟に囲まれて生長し、自意識の人となつてゐるから、モウ頓悟直覚ばかりで自然に書くという訳にはゆかぬ、シェイクスピアのような客観作家は十九世紀の今日には自然には出来ない。そこで作家の自^{セルフカルチャー}修が必要であり、このためには学理の研究が必要であるから、哲学の研究は止むを得ないものである。」大体以上のように述べてゐる。この議論は本当にものわかつた議論であり、自意識、無意識といったフロイド流の考えをすでに立ててゐる点において極めて進歩した考えであるといつてよから

う。

この議論をなすにあたって、逍遙はその講演中に言及しているようにダウデンやモールトンに負うていともいってもよいが、更にティーンやセンツベリーの所説に負うていとも考えられる。殊に逍遙はティーンを愛読したらしく、明治二十六年にはティーンに関する論文を二つほど書いており、又同じ年一月から九月に亘つて書かれた「美辞論稿」(『逍遙選集』第十一卷三一五六頁)には明らかにティーンのミリュール説が見られるのである。

次に逍遙のものとしては、第七十九、八十の両号に載せられた「東都現時の文学界」なるものがある。これも講演筆記であるが、これは「稿を同氏に寄せて若干の添削を経た」と附記されている。内容は、明治文学を外国文学研究者の目で見たものであつて、文学と形式、種類、主義(精神)の三つの分野から見て、文学界の風潮を論じたものであるが、特に優れたものではない。逍遙はこのころ、毎年『早稻田文学』一月号に前年の文学界の風潮を展望しているが、この論文はそれらの何れとも同一ではない。

坪内逍遙の文章の他、文学的に興味ある論文を拾うならば、第七十一号に坂田貞之助の「英雄崇拜と宗教」、第七十六号の社説「基督教界近時の傾向」(ワッツワースの引用あり、又汎神論的、神秘主義的傾向を論ず)、同じく七十六号の雑録に見える南風子の「芙リードリッヒ・フォン・志ルレル」、第七十七号の松籟野史の「アダム・スミス論」、第七十八号の浮田和民の「人種と文明の関係」、第七十九号の社説「戦争と平和」、第七十九、八十号の鎌田亥四郎の「シーペンハウエルの厭世観を批評す」、第八十号の南風子の「維ルヘルム・フォン・奮ポールト」、同号の雑録、大谷晋次郎の「登富士山記」や嘯月生の「消夏録」、第八十一号の論説、福地源一郎の「日本の文章」、第八十三号の社説、児玉亮太郎の「日清問題と日本教育家」、第八十五号の平瀬龍吉の「日本に於ける同志社神学校の位置」(マコーレ、ボ

ズウェル等の引用を持つ好論文)、第八十六号の社説「世界大の胸宇」など特に注目すべきものと思われる。

第七十一号は明治二十六年十一月発行、第八十七号は明治二十八年四月発行であつて、この間は正に日清戦争の時期に当り、従つて文学プロパーよりは、政治、外交、宗教、風紀の問題が大きく取り扱われているのは無理からぬことである。宗教関係のものとして注目すべきもの二三を挙げるならば、先ず、第七十三号に登載された新島先生の説教「両刃の剣」、坂田貞之助の「旧神学と新神学」(ライマン・アボットの「基督教の進化」の大意を紹介したもので、第七十三、四、五号とつづく大論文)、第八十二号の小崎弘道の「信仰上の経験」や第八十七号の社説「興国の時機に際し謹て我同胞に警告す」など、特に熱の入つた論文である。

第七十三号以後「海外思想」欄を設け、海外の新思想を紹介していることは注目に価することであろう。第七十三号には「進化と道徳」と題してハックスレーの「進化と道徳」なる講演を「ポピュラー・サイエンス・モンストリー」より紹介し、又「宗教と道徳」と題して、ウィルヘルム・ベンデルの思想を「フィロソヒカル・リビュー」より紹介し、第七十四号では「米国文学衰頹の原因」と題して「フォーラム」誌に登載されたシドニー・フィシャルの文章を紹介している。又この欄に載せられたもので注目すべきもの一つに第七十八号の「トルストイ伯の宗教及道徳論」がある。「英国時事評論」からの紹介であるが、明治十九年森體による訳文はあるとしてもわが国においてトルストイを紹介した文章のうち最も古いものの一つではなからうか。

各巻の巻尾に「文藻」欄があり、漢詩、和歌、新体詩を載せているが、それらの各々については、それぞれ専門家による解説が必要であらう。そのうちの新体詩については、同志社大学人文科学研究所刊行の『人文科学』第一号(昭和四十一年十月発行)に筆者岡本による詳細な解説があることを附言したい。

(岡本昌夫)

号	日付	編集者	発行者
一	明治 二〇・三・二二	松浦 政泰	浮田 和民
二	二〇・四・三〇	"	"
三	二〇・五・二一	"	"
四	二〇・六・一一	"	"
五	二〇・七・三〇	花畠 健起	"
六	二〇・九・三〇	"	原 忠美
七	二〇・一〇・三一	"	"
八	二〇・一一・一〇	"	"
九	二〇・一二・一七	"	"
一〇	二一・一・三一	望月興三郎	桜井 幹
一一	二一・二・二八	"	"
一二	二一・三・二七	"	"
一三	二一・四・二七	柏木 義円	広瀬孝二郎
一四	二一・五・三〇	"	"
一五	二一・六・三〇	"	"
一六	二一・七・四	"	"
一七	二一・一〇・一〇	"	"
一八	二一・一二・二五	花畠 健起	広津 友吉
一九	二二・一・三〇	柏木 義円	広津 友吉
二〇	二二・二・一五	"	"
二一	二二・四・三〇	木山厳太郎	青木 要吉
二二	二二・五・三〇	"	"
二三	二二・六・一七	"	"
二四	二二・七・三一	"	"
二五	二二・九・三〇	"	"
二六	二二・一〇・三一	"	"
二七	二二・一一・三〇	木山厳太郎	青木 要吉
二八	二二・一二・二一	古賀鶴次郎	波多野培根
二九	二三・一・二五	"	"
三〇	二三・二・二五	"	"
三一	二三・三・二五	"	"
三二	二三・四・二五	"	"
三三	二三・五・二五	"	"
三四	二三・七・二五	"	"
三五	二三・九・三〇	"	"
三六	二三・一〇・三一	"	"
三七	二三・一一・三〇	坂田貞之助	河本 竹松
三八	二三・一二・?	"	"
三九	二四・一・三一	"	"
四〇	二四・二・二八	"	小滝無事郎
四一	二四・三・二五	"	"

『同志社文学』編集略譜

『同志社文学』解題

六四	六三	六二	六一	六〇	五九	五八	五七	五六	五五	五四	五三	五二	五一	五〇	四九	四八	四七	四六	四五	四四	四三	四二	
二六・四・二〇	二六・三・二〇	二六・二・二〇	二六・一・二三	二五・二・二〇	二五・一・二〇	二五・一〇・二〇	二五・九・二〇	二五・八・五	二五・六・二〇	二五・五・二〇	二五・四・二〇	二五・三・三〇	二五・二・二〇	二五・一・二〇	二四・二・二〇	二四・一・二〇	二四・一〇・三一	二四・九・三〇	二四・八・一五	二四・六・三〇	二四・五・三〇	二四・四・三〇	二四・四・三〇
〃	〃	磯貝由太郎	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	石塚 正治	〃	〃	〃	〃	〃	〃	塩井健太郎	〃	〃	〃	〃	坂田貞之助	
〃	〃	柏木 義円	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	長谷川又之丞	〃	〃	〃	〃	〃	〃	山本 徳尚	〃	松浦 政泰	〃	〃	小滝無事郎	
八七	八六	八五	八四	八三	八二	八一	八〇	七九	七八	七七	七六	七五	七四	七三	七二	七一	七〇	六九	六八	六七	六六	六五	
二八・四・二〇	二八・三・二〇	二八・二・二三	二八・一・二三	二七・二・二〇	二七・一・二三	二七・一〇・二三	二七・九・一九	二七・八・一	二七・六・二三	二七・五・二三	二七・四・二三	二七・三・二三	二七・二・二三	二七・一・二〇	二六・二・二〇	二六・一・二〇	二六・一〇・二〇	二六・九・二〇	二六・八・二〇	二六・七・二〇	二六・六・二〇	二六・五・二〇	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	磯貝由太郎
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	柏木 義円
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	坂田貞之助
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	柏木 義円

本名とペンネーム

本名	ペンネーム
麻生 正藏(明20・英)	白木正藏(旧姓の麻生に復す)、天帚子
花島 健起(明21・英普)	花島東州、K・フラワフキルド
橋本 喜作	橋本奇作、橋本嘯月、一笠庵、一笠庵嘯月、嘯月一生、嘯月散史、嘯月生、嘯月子
広津 友信(明21・英普)	広津友吉(改名前)
井出 義久(明14・英本)	義久
池袋 宗充(明18・邦神)	池袋清風、案山子廼舎
石塚 正治	鹿州子
磯貝由太郎(明22・英普)	磯貝雲峯、雲峯、雲峯逸史、雲峯生
巖谷 季雄	巖谷漣、漣山人
柏木 義四(明22・英普)	香峰散人、香峰生、K・G(?)
勝 安房	物部安房
木山巖太郎(明21・英普)	木山生、K・G(?)
児玉亮太郎(明25・普)	児玉竜山
古賀鶴次郎(明23・普)	古賀快象
近藤又三郎	近藤鉄腸
松浦 政泰(明20・英)	美軒小史
松山 高吉	高吉
三輪 源造(明23・普)	花景子
森田久万人(明12・英余)	くまと居士
望月興三郎(明20・英)	フル・ムーン、望月散人
村田 勤(明20・英)	素軒学人、素軒逸士
中井 弘	中井桜洲、桜洲山人

中瀬古六郎(明22・英普)	南風子、難風子
西村 時彦	西村天囚、天囚生
納 三治	明海漁史
大西 祝(明14・英余)	旭操居士、操山居士、大西秋海(?)
大島 正健	大島湘川、湘川漁史
坂口 栄	S・S(?)、西海漁夫(?)
坂本 義夫(明25・普)	坂本警月
坂田 丈平	坂田警軒、警軒潜夫、警軒小史
坂田貞之助	S・T
佐々倉代七郎(明26・普)	佐々倉天風
塩井健太郎(明24・普)	浩堂散士、浩堂散史、塩井浩堂
高安 三郎	秋風吟客
武内忠次郎(明24・普)	孤塞生
玉井 静	玉井掬水
戸川 安宅	戸川残花
浅田 次郎(明21・英普)	海士が家の主人、白雲居士、しら雲
坪内 雄三	坪内道遙
露無 文治(明21・英普)	T・B
浮田 和民(明12・英余)	U・K
山下 政吉	花田政吉(旧姓の山下に復す)
山路 弥吉	愛山、山路愛山
湯浅 吉郎(明15・英本)	吉郎

(注) 津崎氏の調査による。a b c 順に配列した。英II英学校英学科卒業、英余II英学校余科卒業、英本II英学校本科卒業、英普II英学校英学普通科卒業、普II普通学校卒業、邦神II邦語神学科卒業。

明治二十八年五月・同志社文学社



後列 中瀬古六郎 橋本奇策 柏木義円 坂本義夫 山本徳尚

前列 大谷晋二郎 坂田真之助 湯浅吉郎 児玉亮太郎

